

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（227）

特定交通安全等整備事業（深川工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

や な ぎ さ こ い せ き

柳迫遺跡

（曾於市末吉町深川）

2024 年 12 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



遺跡遠景（遺跡を北東上空から）



溝状遺構（南から）

序 文

この報告書は、特定交通安全等整備事業に伴って令和5年度に実施した、曾於市末吉町深川に所在する柳迫遺跡の発掘調査の記録です。

柳迫遺跡では、縄文時代後期、古代の遺物と中世の遺構が発見されました。

なかでも、中世の溝状遺構が4条検出され、当時の人々の生活や行動の実態を知る、手がかりとなりました。

また、縄文時代後期の遺物として、丸尾式土器や中岳Ⅱ式土器が出土しました。出土遺物の中心となる中岳Ⅱ式土器は、曾於市末吉町南之郷に位置する中岳洞穴が標式遺跡となる土器で、大隅半島を中心に出土しており、中岳Ⅱ式土器の広がりを新たに確認することができました。

本報告書が県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、普及・啓発の一助となれば幸いです。

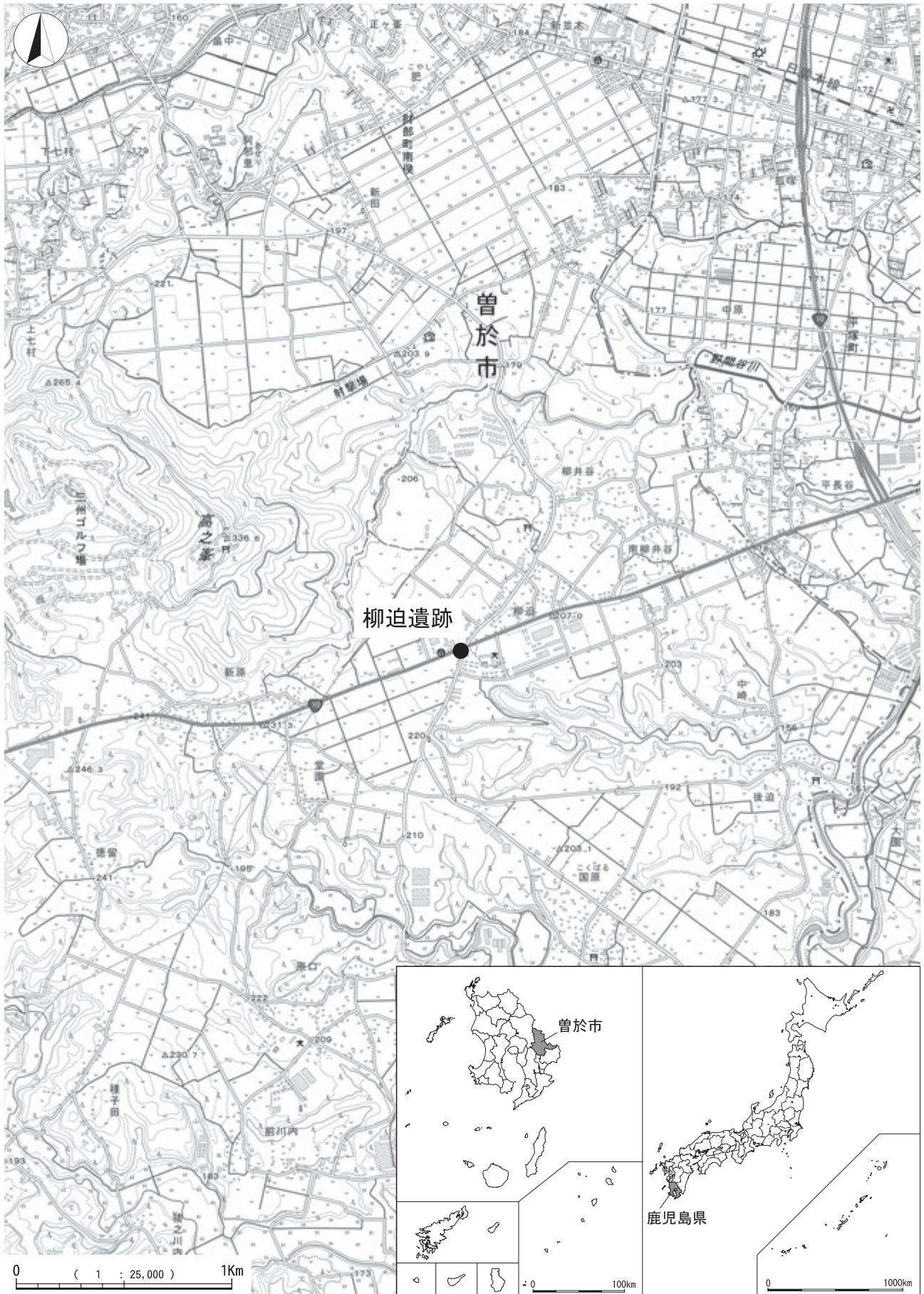
最後に、調査に当たり御協力いただいた県土木部道路維持課、県教育庁文化財課、曾於市教育委員会、発掘調査・整理作業に従事された地域の方々、本遺跡が所在する曾於市末吉町の皆様、その他関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和6年12月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 中 村 和 美

報告書抄録

ふ り が な	やなぎさこいせき							
書 名	柳迫遺跡							
副 書 名	特定交通安全等整備事業（深川工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シ リ ー ズ 名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第227集							
編 集 者 名	上浦麻矢・黒川忠広							
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811							
発 行 年 月	2024年12月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
やなぎさこいせき 柳迫遺跡	かこしまけん 鹿児島県 そおし 曽於市 すえよしちょう 末吉町 ふかがわ 深川	46217	217-399	31° 41′ 55″	131° 01′ 24″	試掘調査 2022.7.26 本調査 2024. 1.10 ～ 2024. 2.27	700	特定交通安全 等整備事業に 伴う記録保存 調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主要な遺構		主要な遺物		特記事項	
やなぎさこいせき 柳迫遺跡	散布地	縄文時代 後期	－		丸尾式土器，西平式土器， 中岳Ⅱ式土器，石鏃，磨 製石斧，石皿			
		古代	土坑2基		土師器（甕）			
		中世	溝状遺構4条					
		時期不明	帯状硬化面1条					
要約	柳迫遺跡は，曽於市末吉町深川に所在する。主な成果として，遺構は中世の溝状遺構4条が検出され，遺物は縄文時代後期・古代の遺物が出土した。 溝状遺構は，調査区の西側に位置し，文明ボラで覆われ，南北に延びる。縄文時代後期の遺物は，中岳Ⅱ式土器が中心で，中岳Ⅱ式土器の深鉢と三万田式土器や御領式土器の流れをくむ浅鉢が共伴して出土しており，鹿児島県の大隅半島北部と都城市南部一帯で出土している中岳Ⅱ式土器の広がりを新たに確認できるものである。							



遺跡位置図

例 言

- 1 本書は、特定交通安全等整備事業（深川工区）に伴う柳迫遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、曾於市末吉町深川に所在する。
- 3 発掘調査は鹿児島県土木部道路維持課の依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は令和5年度に実施し、整理・報告書作成作業は令和6年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 掲載遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、表、図版の番号は一致する。
- 6 遺物注記等で用いた記号は、「ヤナ」である。
- 7 （挿図の）縮尺は、挿図ごとに示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
- 9 本書で使用した方位は、すべて磁北である。
- 10 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。また空中写真の撮影は、山下堪郎が行った。
- 11 遺構の埋土や土器の色調、土層断面の土色は『新版標準土色帖』（1970年度版、農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。
- 12 遺構図等の作成・トレースは、上浦が整理作業員の協力を得て行った。
- 13 遺構名については、調査時の番号から掲載順の番号に変更し、掲載することとした。原資料（図面・遺物・写真等）の注記には、調査時の遺構名で記載されている。対応表は次のとおりである。
 - ・SD001 - 1 ～ SD001 - 4 → 溝状遺構1～4（SD001～SD004）
 - ・SD002 → 带状硬化面
 - ・SK005 → 土坑1号（SK001）
 - ・SK004 → 土坑2号（SK002）
- 14 出土遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センターの写場にて、辻明啓が行った。
- 15 本書の編集は、上浦と黒川が担当し、執筆の分担は次のとおりである。
 - 第1～4章 上浦
 - 第5章 上浦・黒川
- 16 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

本文目次

巻頭図版

序文

報告書抄録

例言

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯…………… 1

第2節 本調査…………… 1

第3節 整理・報告書作成…………… 2

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境…………… 3

第2節 歴史的環境…………… 3

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法…………… 9

第2節 層序…………… 10

第4章 調査の成果

第1節 縄文時代後期の調査…………… 15

第2節 古代・中世の調査…………… 19

第3節 時期不明の遺構…………… 22

第5章 総括

第1節 縄文時代後期の成果…………… 25

第2節 古代・中世の成果…………… 26

第3節 文明ボラ検出遺構について…………… 26

第4節 おわりに…………… 27

写真図版 …………… 31

挿図 目次

第1図	周辺遺跡位置図	7
第2図	柳迫遺跡グリッド配置図	12
第3図	土層断面（1）	13
第4図	土層断面（2）	14
第5図	縄文時代後期遺物出土状況図	16
第6図	縄文時代後期 出土土器（1）	17
第7図	縄文時代後期 出土土器（2）	18
第8図	縄文時代後期 出土石器	18
第9図	古代中世遺構配置図及び遺物出土状況図	20
第10図	土坑1・2	21
第11図	古代 出土土師器	21
第12図	時期不明遺構配置図	22
第13図	溝状遺構1～4	23
第14図	石鏃 顕微鏡写真	25
第15図	文明ボラを含む遺構検出遺跡一覧表	28
第16図	鹿児島県実測図（明治10年陸軍参謀局）（鹿児島県立図書館所蔵）	30

表 目次

第1表	周辺遺跡一覧表	8
第2表	柳迫遺跡基本層序	11
第3表	縄文時代後期 出土土器観察表	24
第4表	縄文時代後期 出土石器観察表	24
第5表	古代 出土土師器観察表	24
第6表	文明ボラを含む遺構検出遺跡一覧表	29

図版 目次

巻頭図版 遺跡遠景（遺跡を北東上空から）溝状遺構（南から）

図版1	空撮写真・縄文時代後期遺物出土状況	31
図版2	古代の遺構	32
図版3	中世の遺構（1）	33
図版4	中世の遺構（2）	34
図版5	縄文時代後期の遺物（1）	35
図版6	縄文時代後期の遺物（2）古代遺物	36

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部道路維持課（以下、道路維持課）は、特定交通安全等整備事業に先立って、事業対象地内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）に照会した。

これを受けて、県文化財課が過去の埋蔵文化財分布調査の実施結果と照合したところ、事業区域内に柳迫遺跡の所在することが判明した。道路維持課、県文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の三者で協議した結果、対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該遺跡において試掘調査を実施することとした。

試掘調査は、県文化財課が埋文センターの協力を得て、令和4年7月26日に実施した。対象地域内の3か所にトレンチを設定し調査を実施した。その結果、2か所から硬化面の検出や土器片が出土し、古代や縄文時代の遺物包含層が確認され、古代や縄文時代の遺構や遺物が工事対象範囲全体に広がることが想定された。その結果を踏まえ、遺跡の取り扱いについて県文化財課、道路維持課、埋文センターの三者で協議した結果、遺跡の現地保存は困難であることから、埋文センターが令和5年度に本調査を実施することとした。

第2節 本調査

協議の結果、本調査が必要となった表面積700㎡の調査を、職員2名、発掘作業員10名体制で、令和6年1月10日から令和6年2月27日までの期間実施した。調査体制および調査経過の詳細については、以下のとおりである。

(1) 調査体制

事業主体 鹿児島県土木部道路維持課

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

調査企画

所	長	中村	和美
総務課	長	荒瀬	勝己
調査課長兼南の縄文調査室長		黒川	忠広
文化財主事兼第一調査係長		平	美典
文化財主事		上浦	麻矢
文化財主事		隈元	俊一
総務係	長	白坂	由香
主査		斜木	吉夫

調査担当

調査担当

事務担当

(2) 調査経過

1月 事前準備，表土剥ぎ，J・K-9～13区Ⅱ・Ⅲ層調査，I-10・11区Ⅱ・Ⅲ層調査，IVa層上面地形測量，遺物取り上げ，SD001-1～SD001-4写真撮影・調査，SD002調査・実測，J・K-10～13区Ⅲ～IVa層調査

26日：曾於高校2年生職場体験，産業医冬期現場視察

2月 J・K-9～13区IVa層調査，SD001-1～SD001-4調査，土層断面実測，IVb層上面地形測量，J・K-10・11区下層確認トレンチ調査（IVb～VIb層無遺物層機械掘削，Ⅶ～ⅩⅢ層人力掘削），発掘調査終了

8日：空撮 16日：試掘調査，始良市文化財保護審議会委員 成尾英仁氏来跡

第3節 整理・報告書作成

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，令和6年度に埋文センターで行った。

調査体制及び作業経過は，以下のとおりである。

1 整理作業

(1) 作成体制

事業主体 鹿児島県土木部道路維持課

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

調査企画

所 長 中村 和美

次 長 兼 総 務 課 長 南 安洋

調査課長兼南の縄文調査室長 黒川 忠広

文化財主事兼第一調査係長 平 美典

調査担当

文 化 財 主 事 上浦 麻矢

事務担当

主 幹 兼 総 務 係 長 白坂 由香

主 査 斜木 吉夫

報告書作成指導委員会 令和6年9月24日ほか3回 黒川忠広調査課長ほか6名

報告書作成検討委員会 令和6年9月24日ほか3回 中村和美所長ほか6名

(2) 整理作業の経過

4月 遺物水洗い，注記，土器接合，原稿執筆

5月 土器実測，石器実測，原稿執筆

6月 土器実測，土器拓本，石器トレース，原稿執筆

7月 土器トレース，レイアウト，原稿執筆

8月 写真撮影，遺物整理，図面整理，原稿執筆，報告書印刷製本入札

9月 遺物整理，収納，データ整理

10月 校正

11月 校正，収納

12月 報告書納品

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

柳迫遺跡は、鹿児島県曾於市末吉町深川に所在する。曾於市は大隅半島の北部に位置し、北に宮崎県都城市、東に志布志市、南側に曾於郡大崎町、西側は霧島市、鹿屋市と隣接している。平成17年7月に末吉町・財部町・大隅町の3町が合併し、曾於市が誕生した。人口約3万2千人（令和6年6月現在）を有し、面積は390.14km²で鹿児島県全体の4.3%を占め、そのうち60%が森林である。曾於市の北部地域は、大淀川流域に開け、都城盆地の一角をなし、南部は志布志湾北部から宮崎県に張り出した形で北から南へと延びる鰐塚山地の一角をなし、西部は四万十層群の高隈山系の延長とみられる瓶臺山（543 m）、白鹿岳（603.9 m）、黒石岳（524.7 m）、荒磯岳（538.7 m）、陣ヶ岡（430 m）など、主として中生代後期から新生代前期の山が南北に連なり、全体的に東方へ傾斜している。

地質の基盤としては、曾於市において最も古い岩石は、四万十層群の砂岩や泥岩、深海底に堆積して形成されたもので、旧財部町北俣にある採石場では、この地層の岩石を砕いて砂利として利用している。また白鹿岳（603.9 m）は、四万十層群で形成されており、この層群は、中生代の白亜紀の約1億4,000万年前のものである。旧末吉町の高之峯（336.5 m）は、火山で安山岩質の溶岩が噴出した。この溶岩は、新生代の新第三紀で絶対年代は約2,400万年～170万年前のものである。高之峯周辺の岩盤は、火山岩類、深成岩類で、山頂付近には安山岩の岩が点在し、花崗岩類の露頭も見られる。新生代第四紀更新世には、安山岩の岩盤の上に始良カルデラ起源とする約29,000年前に噴出した入戸火砕流堆積物、桜島火山を噴出源とする薩摩火山灰、鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰、霧島火山を噴出源とする御池火山灰、桜島火山を噴出源とする文明ボラ、安永ボラ等の火山灰に覆われている。

柳迫遺跡は、旧末吉町北部に位置し、標高212～213 mに立地している。本遺跡から直線距離で約1 km北西には高之峯がある。

第2節 歴史的環境

昭和58年度に鹿児島県教育委員会が行った大隅地区埋蔵文化財分布調査の結果、多くの遺跡が発見された。その後、特殊農地整備事業や東九州自動車道建設に伴って発掘調査が実施され、多大な成果を挙げている。ここでは、曾於市管内における主な遺跡を中心に時代ごとに紹介する。

旧石器時代の遺跡では、桐木遺跡（旧財部町）からはナイフ形石器文化期の遺構で15～20cm程の礫で構成される礫群が検出されている。細石刃文化期においては石器製作の生活の様子がそのまま残されており、数千点の遺物が出土している。桐木遺跡と同一の小台地群に位置する耳取遺跡（旧財部町）では、約80基の礫群と約60ブロックの石器製作跡が検出されている。中には台形石器を多く出土する石器製作跡も検出された。また、女性を表現したとされる線刻礫が出土し、日本最古のヴィーナス像が出土したと想定されている。関山遺跡（旧末吉町）ではナイフ形石器と細石刃が、原村遺跡（旧末吉町）では、角錐状石器、敲石が出土している。

縄文時代草創期の遺跡では、桐木遺跡から集石遺構が検出され、遺物では本県で広く分布する隆帯文土器とは異なり関東地方で見られるものに近い隆起線文土器が出土している。

縄文時代早期の遺跡では、定塚遺跡（旧大隅町）と桐木遺跡、原村遺跡がある。定塚遺跡の集落跡からは、97軒の竪穴建物跡をはじめ、土坑257基、連穴土坑15基、集石遺構54基など多くの遺構が検出された。これらの多くは、前平式土器や加栗山式土器・吉田式土器など、早期でも前半期とされる土器型式の段階のものと考えられ、当時の南九州がきわめて安定した社会を形成していたことがうかがえる。桐木遺跡からは、桜島起源のP-11層の下層から塞ノ神A式土器・平栴式土器・石坂式土器が、上層から塞ノ神B式土器が出土したことから塞ノ神式土器の土器型式の前後関係が明らかとなった。原村遺跡では、遺構として集石41基、竪穴建物跡2基、連穴土坑2基等が検出された。遺物として、前平式から塞ノ神A・B式・苦浜式など15種類という多くの土器型式が出土し、長期間生活が営まれていたことが分かる。また石器は、石槍・磨製石器製品が出土したが、中でも環状石製品は穿孔部に紐ずれ痕が観察されることから、垂飾品として使用されていたと考えられ、南九州における縄文時代早期の石製垂飾品として類例が少なく貴重な資料となっている。

縄文時代中期では、小倉前遺跡（旧末吉町）から春日式の土器が霧島火山を噴出源とする御池火山灰層直下から出土している。宮之迫遺跡（旧末吉町）からは、遺構として竪穴住居跡、炉跡、土坑が検出され、土坑からはドングリ等木の実の炭化物が確認されている。遺物としては、メンコと呼ばれる土器片加工品と石錘・凹石・石斧・敲石・磨石・円盤状石器・石包丁等の石器が大量に出土している。また、桐木遺跡からは大量の石鏃・石匙の石器類をはじめ、瀬戸内系の船元式土器と南九州在来の条痕文尖底土器が共伴して出土している。

縄文時代後期では、中岳洞穴（旧末吉町）から西平式土器・三万田式土器・御領式土器が出土している。また中岳Ⅱ式土器の標式遺跡である。中岳Ⅱ式土器は、曾於市内で11か所確認されており、本遺跡を含めると12か所となる。そのうち、原村遺跡からは、竪穴建物跡と打製石鏃、磨石を伴って中岳Ⅱ式土器が検出されている。また、原村遺跡から約500m北に位置する牧B遺跡（旧末吉町）では、竪穴建物跡と磨製石斧、磨石、敲石を伴って出土している。丸尾遺跡（旧末吉町）は、南九州の縄文時代後期の編年上重要な位置をしめることとなる丸尾式土器の標式遺跡である。台付皿形土器が10点出土し、西北九州の縄文時代後期の西平式系土器（納曽式土器）と共伴している。本遺跡からも1点出土している。西原遺跡（旧末吉町）では、竪穴建物跡とそれに伴う中岳式土器と管玉が出土している。

縄文時代晩期では、入佐遺跡（旧末吉町）から、中心に焼土や炭化物が集中している円形の竪穴建物跡が検出されている。遺物は、粗製深鉢と精製浅鉢が出土し、入佐式土器と名付けられ標式遺跡となっている。入佐遺跡から西南方向へ約500mのところに、塚ヶ段遺跡（旧末吉町）がある。塚ヶ段遺跡では、竪穴住居跡、炉跡、集石、埋納石斧等が検出されている。多くの石器類と勾玉、管玉、小玉、岩偶、異形石器などの特殊石器が出土しており、石刀も表面採集している。滋賀里系土器が出土しており、櫃原文様とみられるものも出土している。中岳洞穴から、入佐式土器・黒川式土器が出土している。上中段遺跡（旧末吉町）からは、入佐式土器・黒川式土器に比定される土器や西北九州の刻目突帯文を有する夜臼式土器が多数出土している。また、甕・鉢・浅鉢・高坏、朝鮮無

文土器に出自すると考えられる丹塗り磨研壺・彩文土器がセットで出土している。鳴神遺跡（旧大隅町）では、磨製石斧・打製石斧・丸のみ 22 本の石斧類が重ねられた埋納遺構も検出されている。踊場遺跡（旧財部町）では、黒川式土器や石鏃、磨石、石錘、磨製・打製石斧等、小型の勾玉が出土している。桐木遺跡では、台地の先端部に 1 軒ずつ点在するように 5 軒の竪穴建物跡が検出されている。

弥生時代の遺跡は、遺構はほとんど確認できず、遺物での確認となっている。原村遺跡からは、刻目突帯文土器・高橋Ⅱ式土器・山ノ口Ⅰ・Ⅱ式土器・丹塗土器・瀬戸内系土器、磨製石鏃が出土している。牧 B 遺跡からは、刻目突帯文土器、甕形土器などが出土している。

古代の遺跡は、鳴神遺跡から掘立柱建物跡、円形周溝状遺構や、土師器、墨書土器、須恵器等が出土している。高篠遺跡（旧財部町）からは、掘立柱建物跡、軽石集石遺構、屋内炉、屋外炉、焼土、土坑、溝状遺構、古道、畝状遺構が検出されている。遺物は、須恵器、墨書土器を含む多数の土師器、石製装飾具、青銅製の装身具、焼塩土器、紡錘車、土錘、羽口、鉄滓などが出土している。踊場遺跡では、掘立柱建物跡、焼土跡、古道跡、軽石集石遺構、礫集石遺構を検出している。遺物として掘立柱建物跡周辺から体部に縦位の彩色を施し、肩部に 3 か所の穿孔を施した土師器の小型壺や脚台付きの土師碗、坏、墨書土器が完形に近い状態で出土している。稲村遺跡（旧大隅町）では、古代～近世にかけての硬化面を伴う道路状遺構や畝状遺構が検出されており、当該期の生活の様子を知るうえで貴重な資料である。

中世の遺跡として、踊場遺跡から桜島起源の P-3（Sz-Bm）文明ボラでパックされた畝跡が遺跡のほぼ全域から検出されている。原村遺跡では、溝状遺構と青磁・青白磁・青花が出土している。また桐木遺跡では、10 条以上の古道群を検出している。文明ボラでパックされていること、遺構内に土師器が入っていることより、古代から中世の遺構とされている。

【参考・引用文献】

曾於市教育委員会

2010『末吉郷土史（第四版）』

末吉町教育委員会

1981『宮ノ迫遺跡』末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）

1986『上中段遺跡・仮牧遺跡・五位塚渡り下遺跡・下ノ窪遺跡・小中野下原遺跡』末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）

1996『塚ヶ段遺跡』末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書（15）

2004『小倉前遺跡』末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書（24）

鹿児島県教育委員会

2005『先史・古代の鹿児島（資料編）』

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2004『九養岡遺跡・踊場遺跡・高篠遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（71）

2005『桐木耳取遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（91）

2008『西原遺跡・牧ノ原B遺跡・原村Ⅰ遺跡・原村Ⅱ遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（124）

2010『定塚遺跡・稲村遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（153）

2021『牧B遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（207）

2021『原村遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（208）



第1図 周辺遺跡位置図

第 1 表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺 跡 台帳番号		所在地	地形	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備 考
1	天神 A 遺跡	217	353	曾於市財部町南俣	散布地				●				
2	天神 B 遺跡	217	354	曾於市財部町南俣	散布地		●	●	●	●	●	●	
3	南俣前床遺跡	217	579	曾於市財部町南俣	散布地	－	－	－	－	－	－	－	
4	小少将前遺跡	217	569	曾於市財部町南俣	－		●				●	●	
5	中崎上遺跡	217	349	曾於市財部町南俣	散布地		●			●	●	●	財部町埋蔵文化財 発掘調査報告書（2）
6	岡ノ下遺跡	217	568	曾於市財部町南俣	－		●	●	●	●	●	●	
7	横尾山遺跡	217	348	曾於市財部町南俣	散布地		●			●	●	●	財部町埋蔵文化財 発掘調査報告書（2）
8	横尾遺跡	217	347	曾於市財部町南俣	散布地					●	●	●	財部町埋蔵文化財 発掘調査報告書（2）
9	谷之口遺跡	217	540	曾於市末吉町深川	散布地				●		●		曾於市埋蔵文化財 発掘調査報告書（4）
10	上簀原遺跡	217	541	曾於市末吉町簀原	－		●			●			
11	中簀原遺跡	217	524	曾於市末吉町深川	散布地				●		●		
12	野間ノ上遺跡	217	543	曾於市末吉町	－		●						
13	下簀原遺跡	217	542	曾於市末吉町簀原	－		●		●	●			
14	和田脇遺跡	217	525	曾於市末吉町深川	散布地		●	●	●				
15	見帰北遺跡	217	573	曾於市末吉町深川	－						●	●	
16	見帰原遺跡	217	572	曾於市末吉町深川	－						●	●	
17	柳迫遺跡	217	399	曾於市末吉町深川	散布地		●			●	●	●	本報告書 曾於市埋蔵文化財 発掘調査報告書（14）
18	末別府野首遺跡	217	521	曾於市末吉町深川	散布地				●				
19	堂園遺跡	217	513	曾於市末吉町深川	散布地			●	●				
20	国原遺跡	217	517	曾於市末吉町深川	散布地				●	●	●	●	
21	後迫遺跡	217	398	曾於市末吉町深川	台地		●						
22	前床遺跡	217	523	曾於市末吉町深川	散布地		●						
23	鳥巢ノ上遺跡	217	512	曾於市末吉町深川	散布地		●						末吉町埋蔵文化財 発掘調査報告書（21）
24	野首小陣跡	217	530	曾於市末吉町深川	城館跡						●		
25	上ノ城跡	217	509	曾於市末吉町深川	城館跡						●		
26	高井田野久尾遺跡	217	567	曾於市末吉町深川	－				●	●	●	●	
27	掛ノ下遺跡	217	566	曾於市末吉町深川	－					●	●		
28	熊野神社	217	425	曾於市末吉町深川	その他						●		
29	宝珠庵城跡	217	532	曾於市末吉町深川	城館跡						●		

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理作業・報告書作成作業の方法について記載する。

1 発掘調査の方法

柳迫遺跡の調査は、令和4年度に試掘調査、令和5年度に本調査を実施した。調査対象表面積約700㎡である。

本遺跡の調査区割り（グリット）は、工事用基準杭「kNO.4」と「kNO.6」の延長線を基準に、10 m間隔でおおよそ北西から南東方向に1・2・3…、おおよそ南西から北東方向にA・B・C…と設定した。このグリッドを基にして、遺構・遺物の測量作業を行った。また、トータルステーションで測量作業を行う場合は、世界測地系の座標値を用いた。

調査範囲は、用地境界などでは安全上の措置として、北西側で約1.5 m程度、南東側で約0.5 m程度、電柱周辺は5 m程度内側に控えて設定した。

発掘調査方法及び概要は以下のとおりである。

発掘調査は基本的に重機で表土を除去した後、試掘調査の結果に基づき、IV a層については人力にて鋤簾等による遺物包含層の掘り下げを行った。遺構については、II a層からIV a層の上面で移植ゴテ等の遺構調査に適した道具を使用し、検出を行った。実測、写真撮影等を行い、トータルステーションを使用して位置とレベルを記録した。遺物はトータルステーションによる点上げを行った。小破片はグリットごと一括して取り上げた。

2 遺構の認定と検出方法

遺構の検出及び調査方法として、当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めた。遺構の認定については、検出面、埋土状況、規模等を総合的に判断し、認定した。本編掲載の主な遺構の認定は以下のとおりである。

溝状遺構の北側一部分の埋土上層に文明ボラが確認されたため慎重に周辺を精査した。溝状遺構が南側に延びるにつれ文明ボラは削平されていたものの、4条検出されたため、西側からSD001-1～SD001-4とした。写真撮影後、完掘し、平面をトータルステーションで実測し、断面を1/10で手実測した。

帯状硬化面は、試掘調査時に検出されており、東西に延びている。溝状遺構に伴う遺構として、SD002の略記号を用いたが、溝状遺構に伴う硬化面としての掘り込み等は確認できなかった。平面をトータルステーションで実測し、断面は1/10で手実測した。

なお、発掘調査時の認定を整理作業の際に再度検討して、最終的に遺構の認定や時期を決定した。

3 整理作業・報告書作成作業の方法及び内容

整理作業・報告書作成作業は、令和6年度に行った。水洗作業の方法は、土器や石器の一部に関しては、ブラシを用い、剥片石器は超音波洗浄機を用いて進めた。注記は、水洗い終了後順次行い、

遺跡名を表す記号を「ヤナ」とした。その後に出土区、層、取り上げ番号等が記してある。

分類・接合作業は、遺構内遺物と包含層遺物に分けた後、包含層出土土器については、土器の文様や調整等から時代・時期を分別し、接合する方法をとった。

石器については、剥片石器と礫石器に分けた後、器種及び石材別に分類した。

遺物出土分布図は、トータルステーションで取り上げたデータを統合し、図化ソフトを使用して作成した。

遺構の認定・分類は、実測図や写真等を用いて、発掘調査担当者と連携を取りながら再検討し確定した。

土層断面や遺構の原図データの点検・修正後、デジタルトレースを行った。



写真１ 整理作業 注記



写真２ 整理作業 実測

第２節 層序

本遺跡の調査着手前の状況は、宅地であった。そのため、一部削平・攪乱の影響を受けている箇所があった。また、調査区内では上位層の中にⅦ a 層であるアカホヤ火山灰が弧状に確認できる箇所があり、倒木による横転が見られた。

試掘調査の段階では、Ⅱ層は単層としたが、文明ボラや黒色土の堆積が確認できたため、３層に分層した。Ⅱ・Ⅲ層は主に遺跡北東部や遺構内にのみ堆積している状態であった。Ⅴ層も御池降下軽石の混入度合いの差により２層に分層している。遺物の出土状況や層の堆積状況等から、Ⅱ b ・Ⅱ c 層を中世、Ⅲ層を古代、Ⅳ層を縄文時代後期該当層とした。基本層序は、第２表に示す。

第2表 柳迫遺跡基本層序

層位	色 調	包含層	備 考	層厚 (cm)
I			表土	30
II a	オリーブ褐色 パミス (2.5Y4/6)		文明ボラ (P 3)	5
II b	黒色土 (10YR2/1)	中世	遺跡北側と遺構内にのみ残存	5
II c	黒褐色土 (10YR2/3)	中世	遺跡北側と遺構内にのみ残存	7
III	暗褐色土 (10YR3/3)	古代	遺跡北東側に堆積	15
IV a	黒褐色土 (10YR2/2)	縄文時代 後期	御池降下軽石含む	20
IV b	黄褐色土 (10YR5/8)		御池降下軽石層 約 4,600 年前	20
V a	黒色土 (10YR1.7/1)		御池降下軽石含む	8
V b	黒色土 (10YR1.7/1)		アカホヤ腐植土層か	25
VI	黒褐色土 (10YR2/3)		アカホヤ腐植土層か	10
VII a	明褐色土 (7.5YR5/8)		アカホヤ火山灰	30
VII b	明褐色パミス (7.5YR5/8)		アカホヤ 1 次降下軽 石含む	6
VIII	黒色土 (7.5YR2/1)	縄文早期		5
IX	黒色土 (7.5YR2/1)	縄文早期	P 11 含む	20
X	黒褐色土 (10YR2/3)	縄文早期	P 11 含む	20
X I	黒褐色土 (10YR2/3)	縄文早期		15
X II	黒褐色土 (7.5YR2/2)	縄文早期		15
X III	明褐色土 (7.5YR5/6)		薩摩火山灰層 12,800 年前	

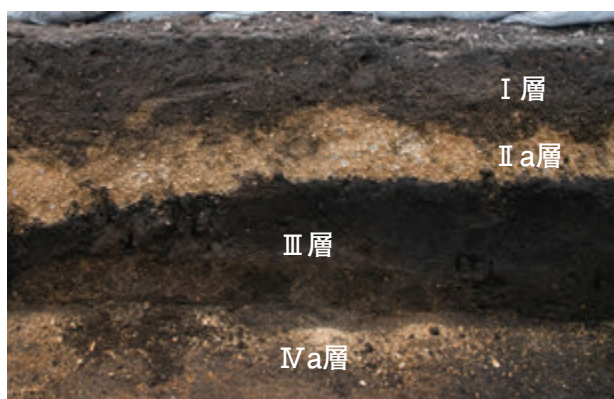


写真3 K-10区土層断面 I ~ IVa 層上面

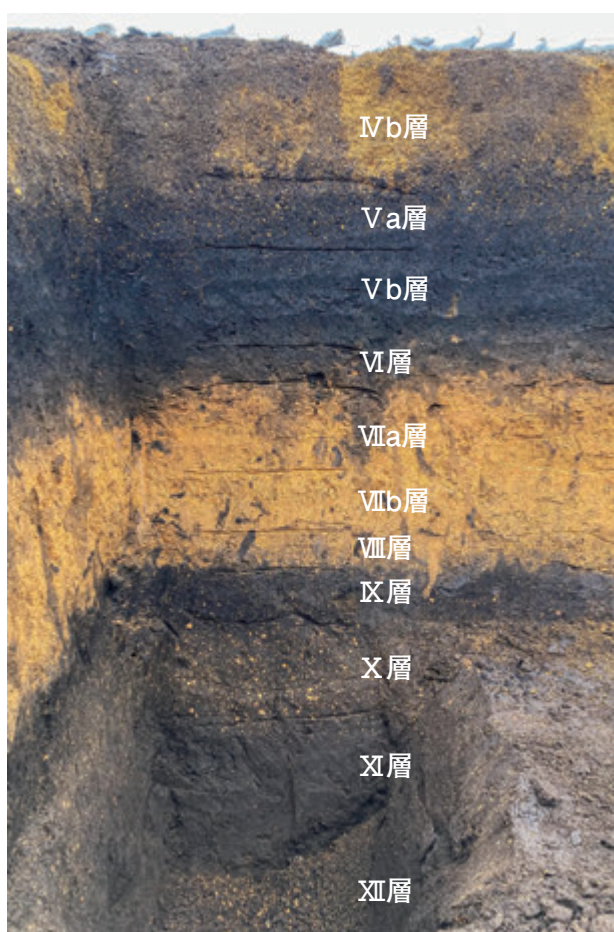
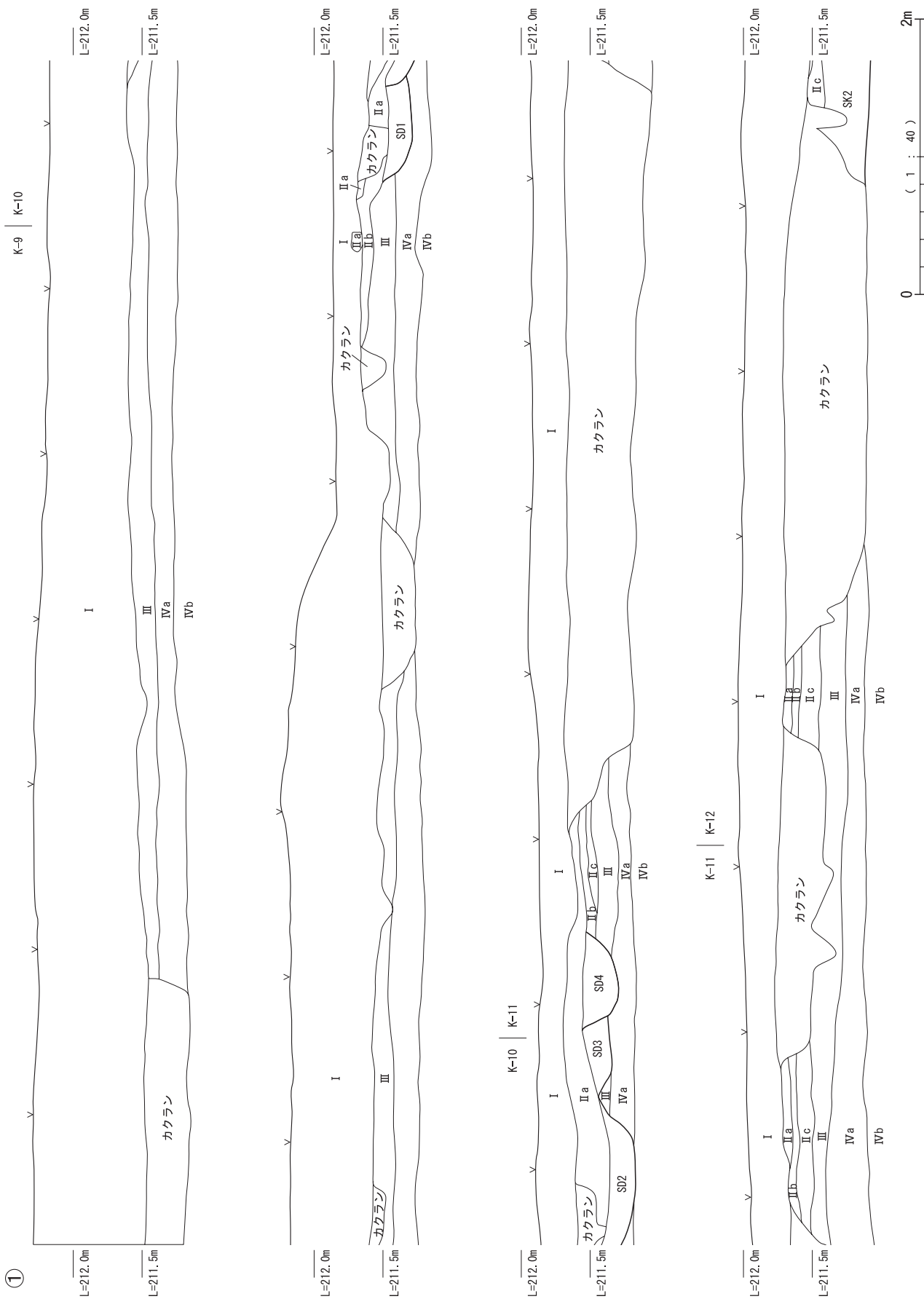


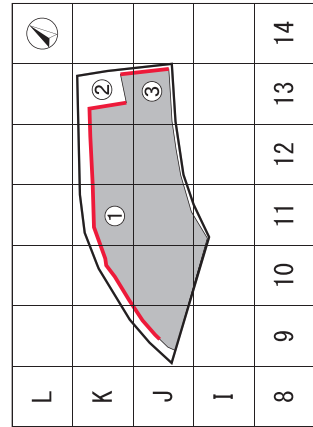
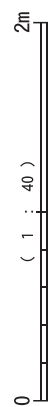
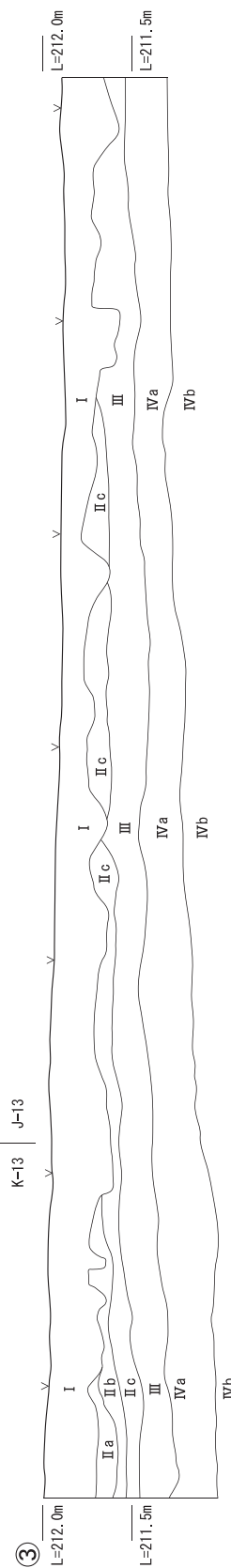
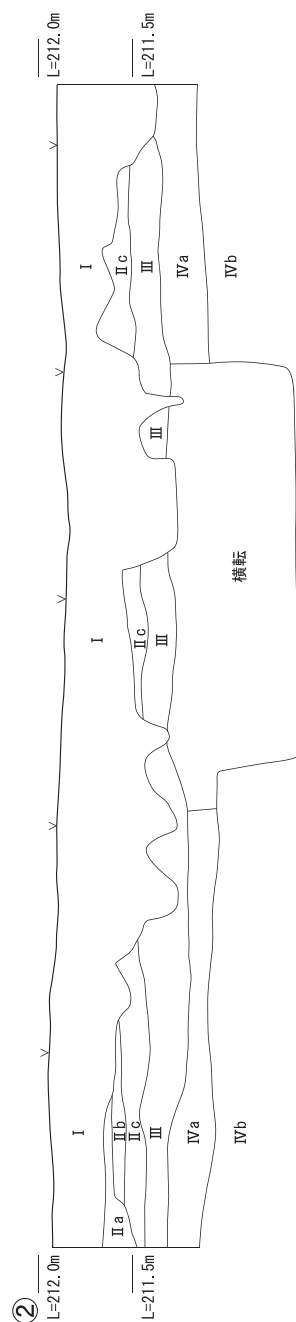
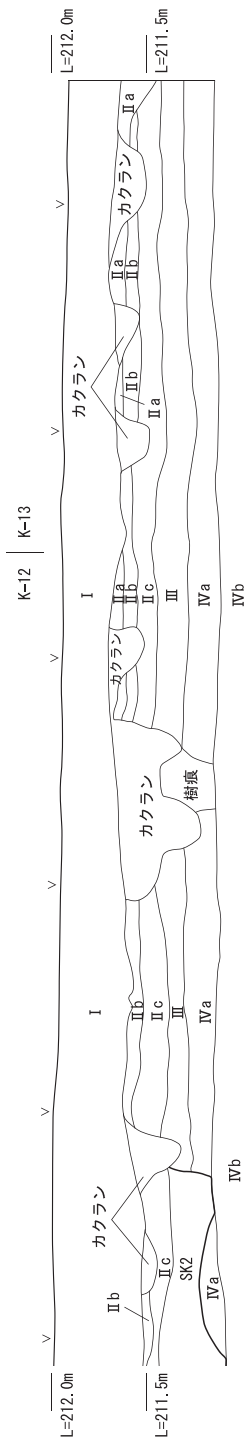
写真4 K・J-11区土層断面 IV b ~ XII 層



第2図 柳迫遺跡グリッド配置図



第3図 土層断面 (1)



第4図 土層断面 (2)

第4章 調査の成果

第1節 縄文時代後期の調査

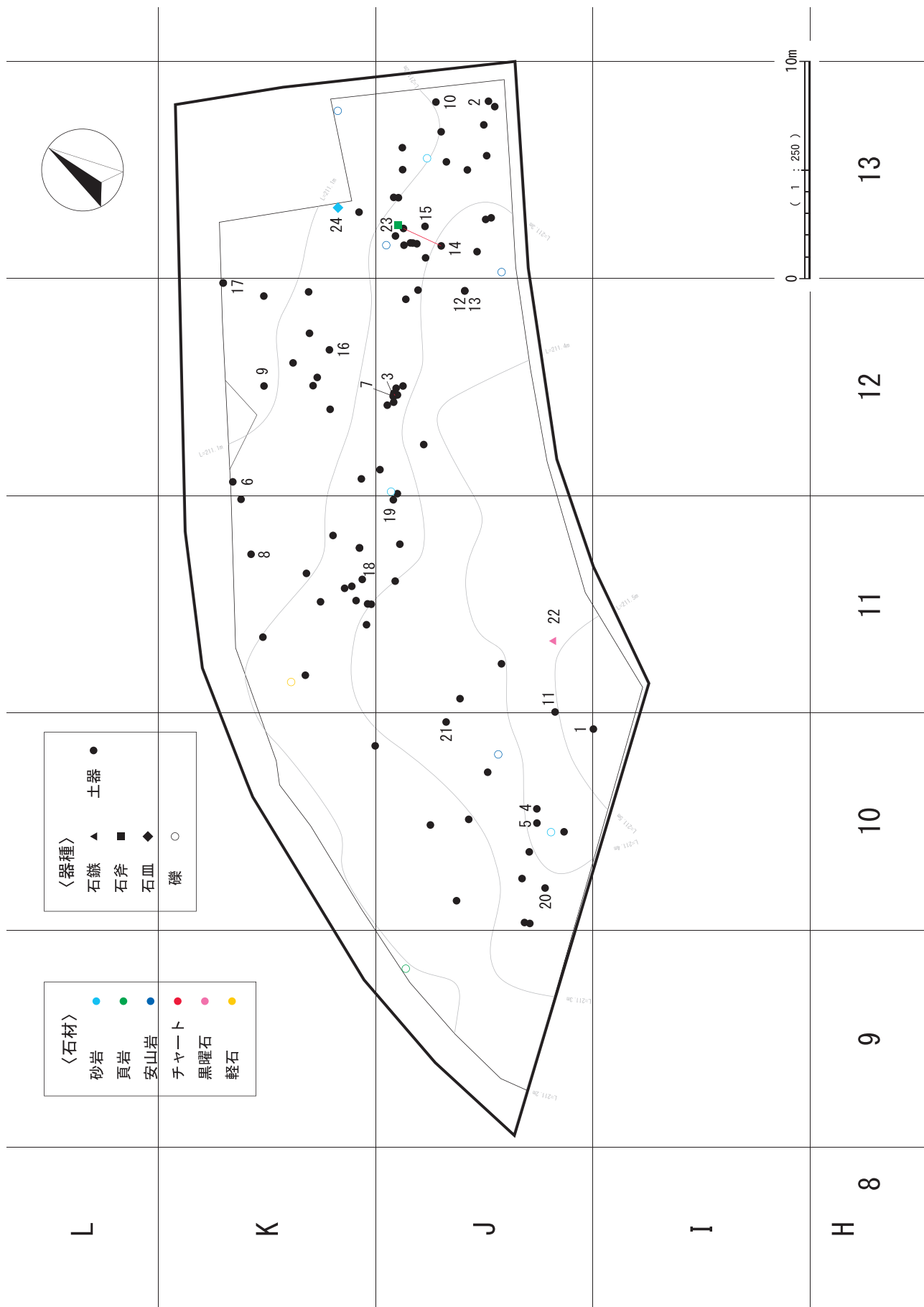
1 調査の概要

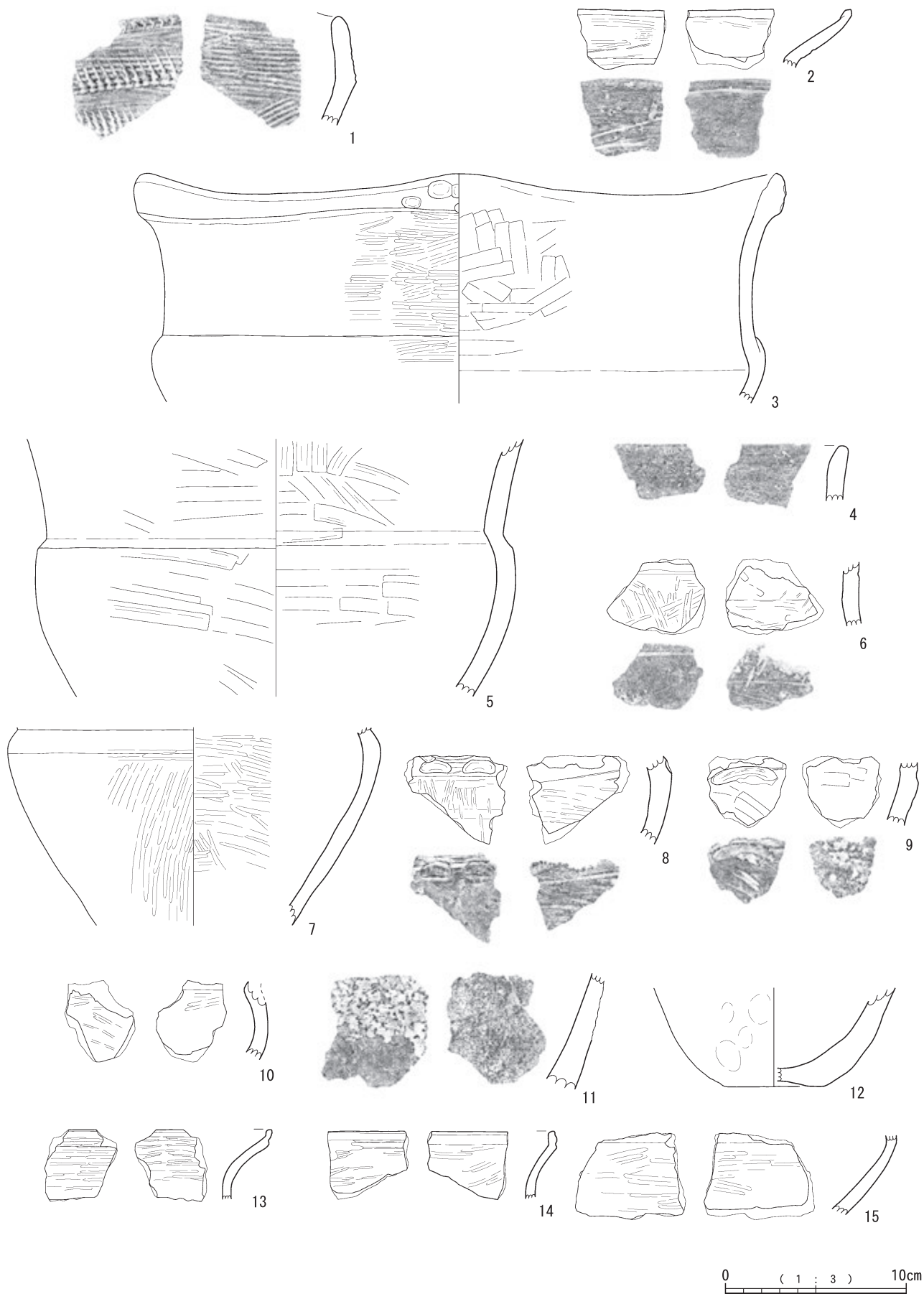
IV a 層は、粘質がややあり、御池降下軽石を含む黒褐色土である。ここでは、IV a 層の調査について詳述する。縄文時代後期に属すると考えられる遺構は検出できなかった。遺物はIV a 層を主体としているが、Ⅲ層下層からも出土している。縄文時代後期の遺物として土器片 110 点と石器 3 点が出土した。遺物出土状況図には、石器 3 点のほか、IV a 層内で確認した礫の石材も併せて掲載する。

(1) 遺物

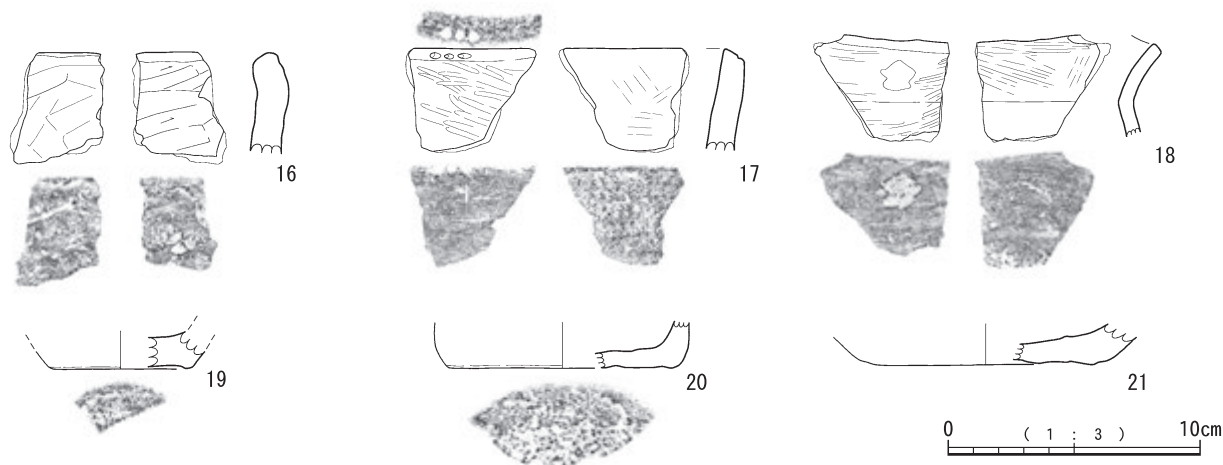
ア. 土器（第6図 1～15、第7図 16～21）

縄文時代後期の土器は、110 点出土しているが、いずれも破片である。そのうち、文様や器種の確認が困難な小片を除く 21 点を掲載する。1 は、丸尾式土器に比定される深鉢の口縁部土器片である。緩やかな波状口縁で、口縁直下に貝殻腹縁で横位に軽く刺突を巡らす。胴部は緩くくの字に屈曲し、稜を挟み 2 段に貝殻腹縁で横位に深く刺突を施す。裏面は、貝殻条痕による調整を行う。2 は、西平式土器に比定される深鉢口縁部の土器片である。口縁端部に面をもち、内反する。口縁部から頸部が大きく外反する鉢である。裏面は、丁寧なヘラミガキを施し、表面は粗製のヘラミガキを行い、工具痕が残る。3～12 は、中岳Ⅱ式土器に比定される深鉢の土器片である。3 の口縁部は肥厚し、波頂部とその下位に楕円状の凹点文を施す。外面はミガキによる調整が観察され、内面は工具ナデの痕が観察される。胴部は段をもち、強く張り出す。4 は厚みがあり、やや外反する口縁部である。5 は胴部で内外面ともに段をもち、工具ナデを施す。6 は上部に 1 条浅い沈線が入る。外面は細かいミガキによる調整が確認できる。7 は強い張り出し部分が確認できる胴部である。外面は縦位に、内面が横位に丁寧なミガキによる調整を行う。8 は内外面ともにミガキで調整を行い、内面はその後ナデを行う。外面上部は、沈線 3 条を巡らし、その上に楕円状の凹点文を施す。また炭の付着が確認できる。9 は上位に幅の広い三日月文を施す。11 は、底部付近の土器片で、上部分はあばた状にはがれる。内部には炭化物が付着する。12 は深鉢の底部である。器壁は非常に厚く、ミガキ調整後、指オサエを行う。13～15 は、中岳Ⅱ式土器にともなう精製浅鉢である。13 は、内外面ともに丁寧な横位のミガキを施す。口縁部に浅い沈線を施し、壁は大きく傾く。14 は口縁部に浅い沈線を 2 条施し、器壁は立ち上がる。15 は器壁がやや厚手の胴部土器片で、縦位から横位と重ねてミガキ調整を施す。16～21 は、縄文後期に比定される土器で型式は不明である。16 は厚みのある土器壁で、表裏ともにケズリを行い、ナデを施す。17 は、口唇部に 3 点の刺突文を施し、表面は丁寧なミガキを施す。18 は非常に薄い器壁で、くの字に外反する口縁部片である。19 はやや厚みのある底部片で、上げ底状を呈する。20 は、炭を細かく砕いた物を混和剤としている。21 は黒色の底部片である。胴部は緩やかに立ち上がる。

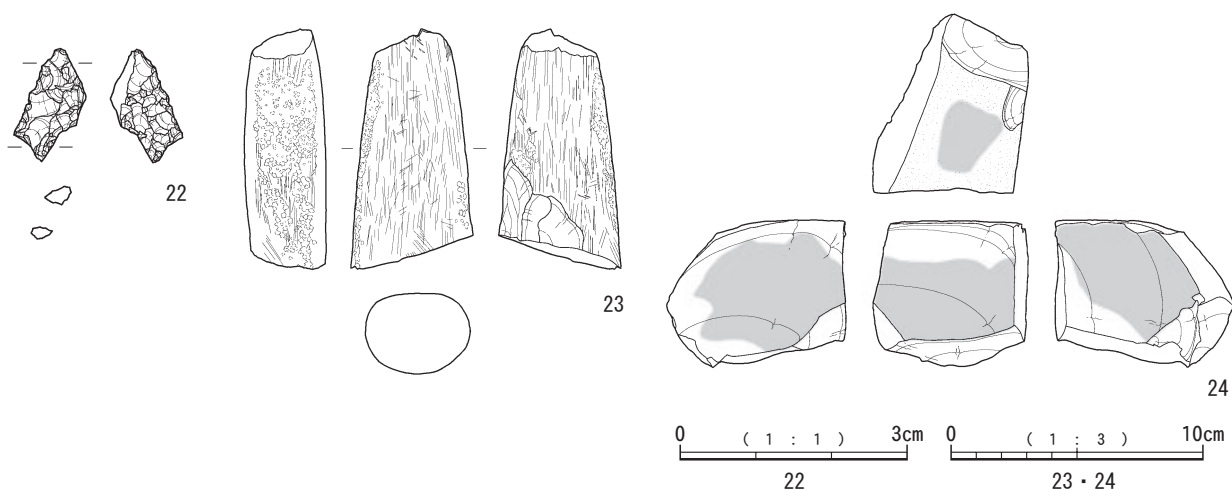




第6図 縄文時代後期 出土土器 (1)



第7図 縄文時代後期 出土土器 (2)



第8図 縄文時代後期 出土石器

イ. 石器 (第8図 22～24)

石鏃 (第8図 22)

22は、三船産と比定される黒曜石を素材とする五角形鏃の石鏃であり、右下先端部が欠損している。残存する脚部の両側から剥離が入っており、石錐の錐部の加工に類似することから、脚の先端をドリルとして再利用した可能性が考えられる。

磨製石斧 (第8図 23)

23は、ホルンフェルス化した頁岩を石材とする磨製石斧の基部である。左側縁に敲打による整形痕が見られる。表裏ともによく研磨されている。使用により破損したと考えられる。

石皿 (第8図 24)

24は、砂岩を石材とする石皿の分割礫である。破断面の3面に摩耗した面が見られる。分割後も研磨具として使用した可能性がある。分割が意図的であるかは不明である。

第2節 古代・中世の調査

1 古代の調査の概要

Ⅲ層は、調査区北東部にのみ堆積し、検出された遺構の埋土も類似している。また、調査区内には横転も多く確認できた。J-10・11区に炭化した樹木が1m程残っているのが確認された。その中で、土師器甕の破片が出土していることから、Ⅲ層や検出された遺構の時期も古代に該当すると判断した。遺構では土坑が2基検出され、遺物では土師器甕の破片が3点出土している。

(1) 遺構

土坑1 (SK001) (第10図)

K-12区、Ⅳa層上面で検出した。長軸約215cm、短軸約90cmである。調査区外と接し、西側は攪乱に切られているため、全容は確認できないが確認できる部分から平面プランは楕円形を呈する。埋土が3層に分層できることから、大きな土坑が作成された後に埋まり、その後また土坑を作成するという過程を繰り返したのではないかと考えられる。

土坑2 (SK002) (第10図)

J-11区、Ⅳa層上面で検出した。プランは長軸134cm 短軸42cm、検出面からの深さは12cmである。検出面の平面プランは、隅丸方形を呈する。埋土は、褐色土の単層で、粒径1～3mmの御池パミスを含む。

(2) 遺物

ア. 土師器甕 (第11図)

古代の土師器甕は、3点出土している。小片を除く2点を図化し、掲載する。25は、口縁部片である。口縁部は大きく外反し、内外面ともにナデ調整を施す。26は、胴部片である。器壁は下部から上部にかけてやや厚くなる。外面は斜位に調整を施した後、下位から上位へ1cm幅のハケで調整を施す。内面は、斜位の粗いケズリを施す。屈曲部とハケ目の位置から、甕の底部付近と推測される。

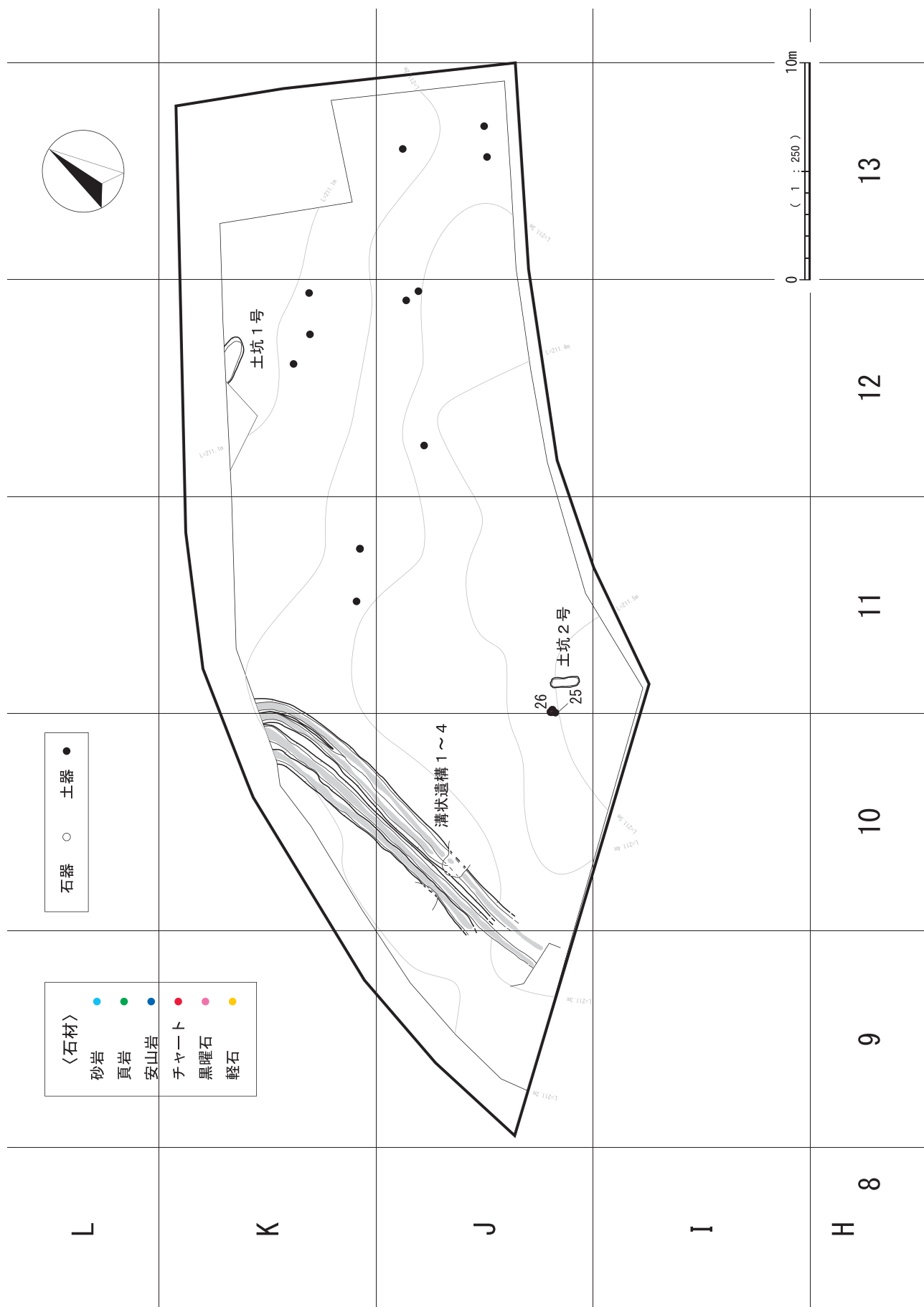
2 中世の調査の概要

Ⅱ層は、遺跡の北側にのみ堆積し、検出された遺構の埋土も類似する。Ⅱ層はⅡa～Ⅱc層の3層に分層した。Ⅱa層は桜島を噴出源とする文明ボラ（文明年間に降下した桜島起源の火山軽石：P3）、Ⅱb層は黒色土、Ⅱc層は黒褐色土である。文明ボラの検出から、Ⅱ層は中世と判断した。遺構は溝状遺構が4条検出された。検出時は、溝状遺構2の断面実測を行った位置から北にのみ文明ボラ（Ⅱa層）が埋土として堆積していたが、西側土層断面を確認したところ、溝状遺構1～4すべての上位に文明ボラ（Ⅱa層）が堆積していることが確認された。そのため溝状遺構は4条ともに中世の遺構として判断した。遺物は出土していない。

(1) 遺構

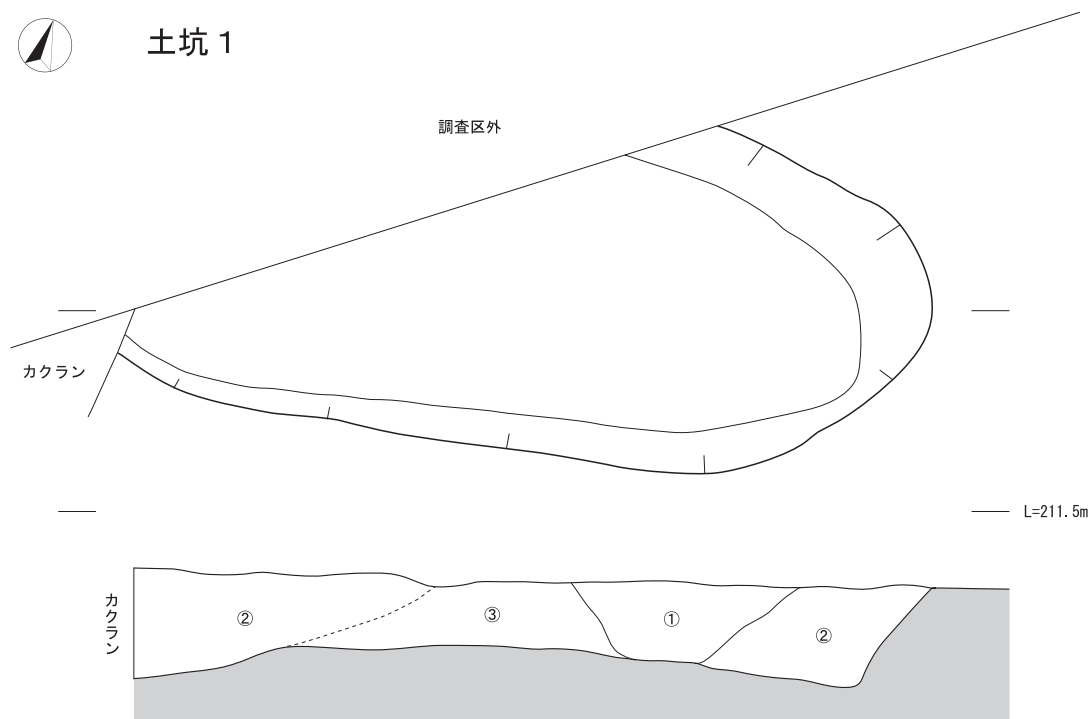
ア. 溝状遺構 (第13図)

溝状遺構は、4条検出されており、いずれも主に南北に渡って延びている。北端は調査区外に続く。旧地形が北から南に行くにつれて高くなっているため、溝状遺構の南側は徐々に浅くなり消失していく。現代の攪乱により、J-10区では溝状遺構1・4の一部、J-9区では溝状遺構2の南端が削平されていた。検出時は、文明ボラが筋状に堆積していることが確認されたことから、溝





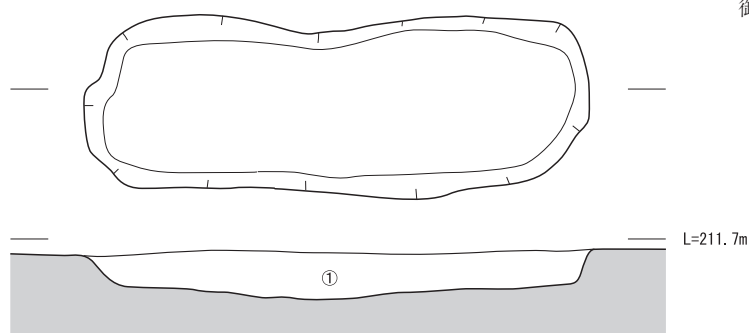
土坑 1



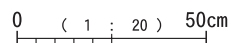
- ①黒褐色土 10YR2/3 しまり弱い 粘性弱い
御池パミス 1～3mm 5%程度含む
- ②暗褐色土 10YR3/4 しまり弱い 粘性弱い
御池パミス 1～4mm 3%程度含む
- ③暗褐色土 10YR3/4 しまり弱い 粘性弱い
御池パミス 1～3mm 1%程度含む



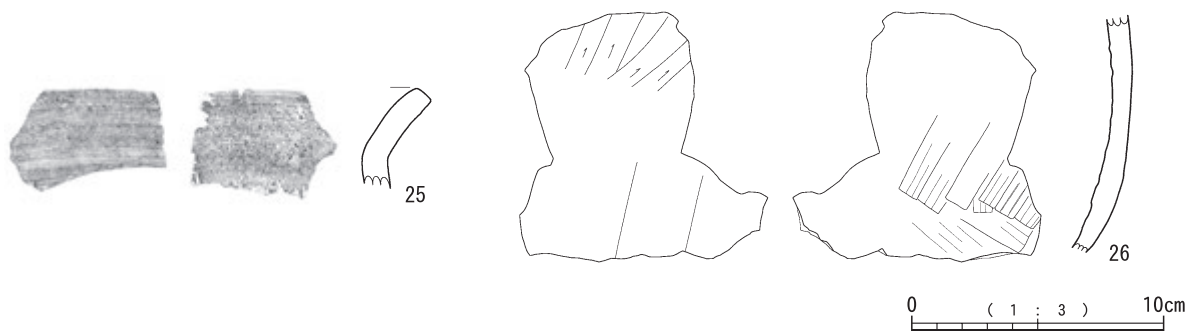
土坑 2



- ①褐色土 7.5YR4/3 しまり無し 粘性普通
御池パミス 1～3mm 1%程度含む



第10図 土坑 1・2



第11図 古代 出土土師器

状遺構を1条（溝状遺構2）検出したとしていたが、調査を進めると、その周囲にさらに3条の溝状遺構（溝状遺構1, 3, 4）を確認した。文明ボラは、平面状では最長である溝状遺構2で残存が良好であったが、北東側土層断面において他の溝状遺構の上層でも文明のボラが堆積していることが確認された。

溝状遺構1（SD001）

K-10区において確認した断面の形状はU字状で、幅約40cm、深さ約20cmの大きさである。下部には幅約30cm、厚さ約8cmの硬化面をもつ。

溝状遺構2（SD002）

K-10区において確認した断面の形状はU字状で、幅約80cm、深さ約30cmの大きさである。下部には幅約45cm、厚さ約8cmの硬化面をもつ。南端部は現代の攪乱によって切られている。

溝状遺構3（SD003）

K-10区において確認した断面の形状は逆台形状で、幅約60cm、深さ約20cmの大きさである。下部には幅約20cm、厚さ約10cmの硬化面をもつ。

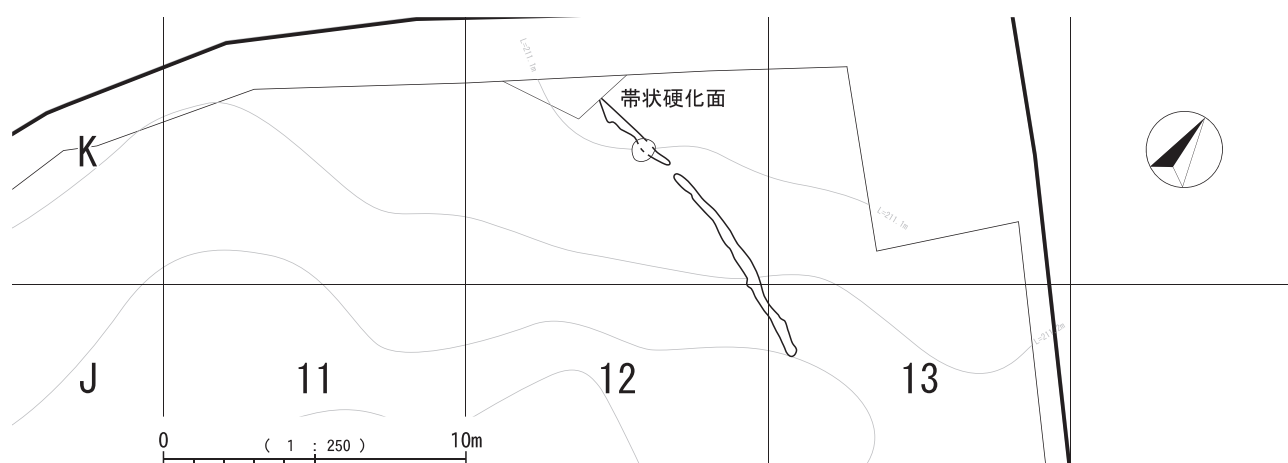
溝状遺構4（SD004）

K-10区において確認した断面の形状は逆台形状で、幅約60cm、深さ約20cmの大きさである。下部には幅約22cm、厚さ約25cmの硬化面をもつ。

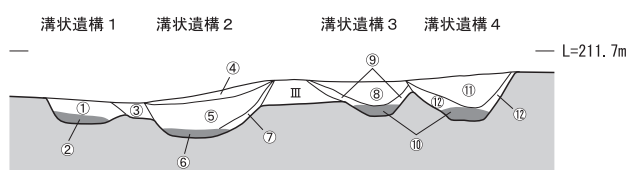
第3節 時期不明の遺構

(1) 帯状硬化面（第12図）

IVa層上面で検出（J・K-12・13区）した帯状硬化面で東西に延びる。幅約40cm、厚さ約6cmで、東側は横転で消失し、西側は現代の攪乱により消失している。溝状遺構に伴う帯状硬化面と想定し、周辺の調査を行ったが、掘り込み等確認することはできなかった。そのため、時期不明の遺構として記載する。



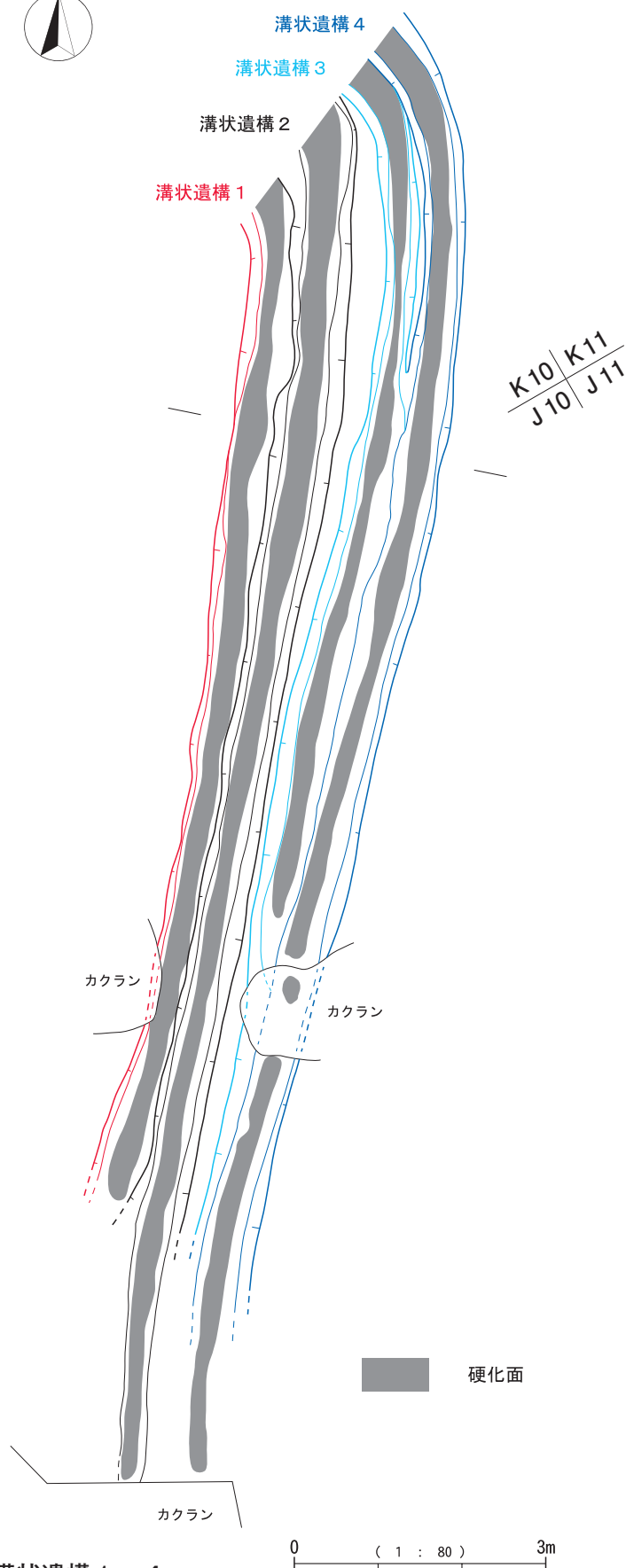
第12図 時期不明遺構配置図



0 (1 : 40) 1m

K9/K10
J9/J10

- ①黒褐色土 10YR2/2 しまり弱い 粘性やや弱い
御池パミス粒径 1mm 1%程度含む
- ②黒褐色土 7.5YR3/2 しまり強い 粘性弱い
御池パミス粒径 1mm 2%程度含む
- ③黒褐色土 10YR3/2 しまり無し 粘性弱い
御池パミス粒径 1mm 1%程度含む
- ④にぶい黄澄パミス 10YR7/4 しまり無し 粘性無し
文明ボラ粒径 1～15mm
- ⑤黒色土 10YR2/1 しまり無し 粘性弱い
御池パミス粒径 1mm 1%程度含む
- ⑥にぶい黄褐色土 しまり強い 粘性無し
御池軽石粒径 1～2mm
- ⑦黒褐色土 10YR2/3 しまり無し 粘性弱い
御池パミス粒径 1mm 1%程度含む
- ⑧黒褐色土 10YR2/2 しまり弱い 粘性弱い
御池パミス粒径 1mm 1%程度含む
- ⑨黒褐色土 10YR2/3 しまり弱い 粘性弱い
御池パミス粒径 1mm 2%程度含む
- ⑩黒褐色土 7.5YR2/2 しまり強い 粘性無し
御池パミス粒径 1～5mm 20%程度含む
- ⑪黒色土 10YR2/1 しまり弱い 粘性弱い
御池パミス粒径 1mm 1%程度含む
- ⑫黒色土 7.5YR2/1 しまり弱い 粘性弱い
御池パミス粒径 1mm 2%程度含む



第13図 溝状遺構 1～4

第3表 縄文時代後期 出土土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	区	層位	取上 番号	器種	部位	主文様・調整		色 調		胎 土					備 考
							外面	内面	外面	内面	角閃石	長石	石英	白色粒	褐色粒	
6	1	J-10	IVa	85	深鉢	口縁部	貝殻刺突文・ナデ	貝殻条痕文	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR5/6 明赤褐	-	○	-	○	-	
	2	J-13	Ⅲ	1	深鉢	口縁部	ナデ	ミガキ	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR6/6 橙	-	○	-	○	○	
	3	J-12	IVa	69他	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/2 にぶい褐	○	○	○	○	○	スス付着
	4	J-10	IVa	89	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	○	-	○	○	○	
	5	J-10	IVa	13	深鉢	胴部	工具ナデ	工具ナデ	5YR5/6 明赤褐	7.5YR4/3 褐	○	○	○	○	○	
	6	K-11	IVa	56	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR4/1 褐灰	○	○	-	○	-	
	7	J-12	IVa	38他	深鉢	胴部	ミガキ状 のナデ	ミガキ・ナデ	5YR4/3 にぶい赤褐	7.5YR3/1 黒褐	○	○	-	○	-	
	8	K-11	Ⅲ	11	深鉢	胴部	逆「U」字 線文・ナデ	貝殻条痕・ ナデ	5YR3/1 黒褐	5YR3/4 暗赤褐	-	○	○	○	-	
	9	K-12	Ⅲ	16	深鉢	胴部	三日月文 ・ナデ	ナデ	7.5YR4/3 褐	7.5YR5/3 にぶい褐	○	○	-	○	-	
	10	J-13	IVa	41	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	5YR5/4 にぶい褐	10YR6/3 にぶい黄橙	-	○	-	○	○	
	11	J-11	Ⅲ	81	深鉢	底部付 近	ナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	○	○	-	○	-	剥がれあり
	12	J-12	IVa	63 79	深鉢	底部	指オサエ ・ミガキ	ミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR5/3 にぶい黄褐	-	○	○	○	-	
	13	J-12	IVa	64	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	10YR4/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	-	○	-	○	-	
	14	J-13	IVa	15 86	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/4 にぶい黄橙	-	○	-	○	-	
	15	J-13	IVa	6	浅鉢	胴部	ミガキ	ミガキ	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR4/2 灰褐	-	-	○	○	○	
7	16	K-12	IVa	47	深鉢	口縁部	工具ナデ	ケズリ・ 工具ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	○	-	○	-	○	
	17	K-12	Ⅲ	103	深鉢	口縁部	三連点刺突文 ・ナデ	ナデ	7.5YR4/3 褐	7.5YR7/6 橙	○	○	-	○	○	
	18	K-11	IVa	50	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/3 褐	○	○	-	○	-	
	19	J-11	IVa	98	深鉢	底部	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR4/2 灰黄褐	-	○	-	○	-	
	20	J-10	IVa	92	深鉢	底部	ナデ	ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	-	○	-	○	-	スミ(混和剤)
	21	J-10	IVa	87	深鉢	底部	ナデ	ナデ	10YR3/1 黒褐	10YR2/1 黒	-	○	-	○	○	

第4表 縄文時代後期 出土石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	区	遺構	層	取上 番号	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備 考
8	22	石鏃	J-11	-	IVa	113	15.0	9.5	2.2	0.2	黒曜石
	23	磨製石斧	J-13	-	IVa	32	94.5	48.0	32.5	226.5	ホルンフェルス化した頁岩
	24	石皿	K-13	-	IVa	107	58.0	61.5	70.5	330.0	砂岩

第5表 古代 出土土師器観察表

挿図 番号	掲載 番号	区	層位	取上 番号	器種	部位	主文様・調整		色 調		胎土					備 考
							外面	内面	外面	内面	角閃石	長石	石英	白色粒	褐色粒	
11	25	J-10	IVa	55	甕	口縁部	工具ナデ	工具ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	-	○	-	○	-	
	26	J-10 J-11	IVa	84 80・82	甕	胴部	工具ナデ ・ハケ目	ケズリ ・ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	-	○	-	○	○	小礫を多量に含む

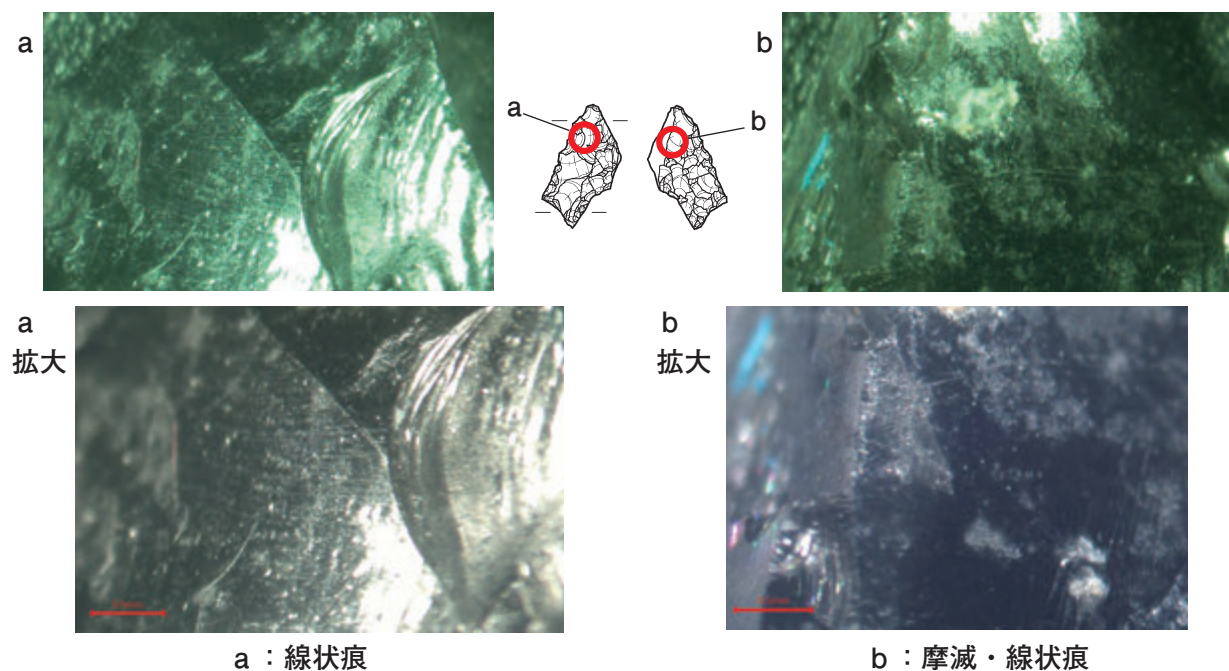
第5章 総括

第1節 縄文時代後期の成果

柳迫遺跡では、IV a層が縄文時代後期該当層であり、遺構は検出されなかったが、土器 110 点、石鏃 1 点、磨製石斧 1 点、石皿片 1 点が出土した。

縄文時代後期の遺物は、器形や文様の特徴などから、中岳Ⅱ式土器に該当する土器が主体となつて、深鉢形が出土している。小片が多いことから、主体となる文様として述べることは難しいが、口縁部や胴部（肩部）文様帯に一定の間隔をおいて施文される文様で、逆「U」字凹線文と三日月文（秦畑 1989）が 1 点ずつ出土している。また、丸尾式土器と西平式土器に該当する土器片が 1 点ずつ出土している。柳迫遺跡同様に丸尾式・西平式土器が中岳Ⅱ式土器と共伴して出土している遺跡は、志布志市の見帰遺跡、鹿屋市串良町に所在する田原迫ノ上遺跡、牧山遺跡、細山田段遺跡等があり、大隅半島の北部から中部にかけて出土している。

石器では石鏃があり、先端の側縁に角がついて五角形になる五角形鏃は、縄文後期に見られるもので、当遺跡の主体となる中岳Ⅱ式土器はもちろんのこと、少数の出土である丸尾式土器や西平式土器を含めた土器との関係性が指摘できる。石鏃は、右側縁と先端を欠損している。先端部をルーペで観察したところ、右側縁の剥離が石鏃作成時の押圧剥離と異なったため、さらに金属顕微鏡を使用して観察を行うと、先端部 a に細かな横方向に付く線状痕を確認した。また、b では稜が摩滅し、その周辺に長い横方向の線状痕を確認した。a、b 部分は表裏で同じような位置に摩滅と線状痕が確認できる（第 14 図）。これは、先端部分を対象物に当てて、回転を伴った動きを行った際に残ったものと考えられる。石鏃として使用し、右側縁欠損後は石錐として再利用した可能性が考えられるが、この点は類例の増加を待って再度検討する必要がある。



第14図 石鏃 顕微鏡写真

第2節 古代・中世の成果

当遺跡では、Ⅲ層が古代該当層であり、遺構としては土坑が2基検出したが、遺跡の性格を捉えることはできなかった。遺物としては土師器の甕が3点出土している。

当遺跡では、Ⅱ層が中世該当層である。中世の遺構として、Ⅱb層からⅣa層まで掘り込んだ溝状遺構が4条検出された。そのうち、溝状遺構2（以下溝2と略す）は埋土に文明ボラの残存が良好であったが、北東側土層断面において他の溝状遺構の上層にも文明のボラが堆積していることが確認された。溝1・2の断面形はU字状、溝3・4は逆台形状を呈している。底面には硬化面を有する。溝1・2は近接し、溝2が1を切る。また溝3・4の両者間は北側の一部分約10cmだが、それ以外は近接し溝4が3を切る状況である。溝4条の時期判断として、切合部分から溝1は2より古く、溝3は4より古いことが確認できたが、溝1・2と溝3・4の時期差については不明である。調査区外の手前では溝3・4はやや湾曲し、溝2と3が近接していくようにも見える。西側土層断面でも切合いは確認できなかったが、調査区外において、溝2を3が切る可能性もあり、溝1から4へ徐々に使用が移り変わっていったことも考えられる。当遺跡の溝状遺構と形状、規模など類似する遺構として桐木遺跡や西原段Ⅰ遺跡があり、桐木遺跡では道跡、西原段Ⅰ遺跡では道路状遺構と述べられている。桐木遺跡では道跡が50条以上報告されている。多くが波板状凹凸面をもつ中、道跡49・50は带状硬化面をもち、2条が南西に延びている。当遺跡の溝状遺構も硬化面をもち、形状も類似していることから道として使用されていた可能性がある。中世から時代は下るが、史料を確認していく中で、古道の記録として『元禄国絵図』や『天保国絵図』等には現在の国分と都城をつなぐ県道478号線から国道10号線にあたる東西に続く主要な古道のみが記載されていた。明治10（1877）年作製の『鹿児島県実測図』には、調査区と思われる付近に末吉－財部方面へ延びる道路が確認でき、現在の県道500号線にあたると思われる（第16図）。当遺跡は調査区が狭く、溝状遺構は約10mしか確認出来ていないため、その後南北にどのように延びていくかは不明であり、現在の末吉－財部間を結ぶ主要道の前身であったかどうかは判断できない。しかし先述したように溝の使用が徐々に西から東へ移っていきながら使用を続けていったことを考えると、その時期に南北をつなぐ道として使用されていた可能性が考えられる。

第3節 文明ボラ検出遺構について

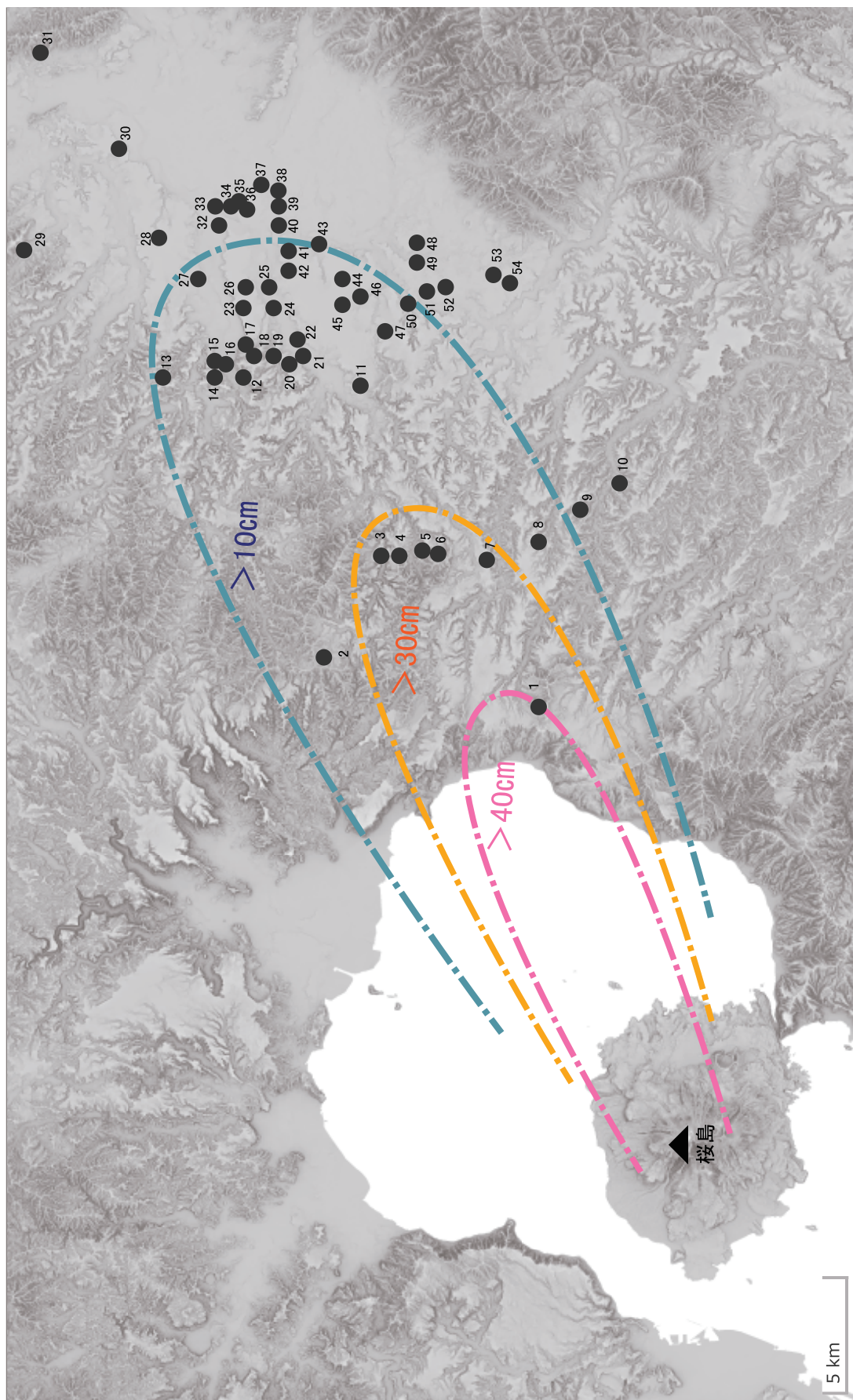
柳迫遺跡では、溝状遺構内に埋土が堆積し、ほぼ埋まったのちに文明ボラが降下し、溝2の上面を覆っている状態であった。この文明ボラは、桜島南岳を噴出源とするテフラで、南岳東山麓の露頭観察で確認された11層の軽石層のうち上から3層目（P3）にあたる層を指すものである（小林1986）。この文明ボラの年代比定に関しては、噴火当時の記録が少なく、後世の編纂物等で紹介されている場合が多い。近世・近代に編纂されたものの中で最も早い噴火の記録があるのは文明3（1471）年であるが、桂庵玄樹が文明10（1478）年の『島陰漁唱』の漢詩中に記載しているのが文明8（1476）年が唯一の同時代の史料としている（重永1991）。桒畑光博・東和幸の両氏は、発掘調査で出土した考古遺物の年代と文献史料が合致しないことを末吉町の平松城跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター1995）や福山町廻城跡の例を示しながら指摘しており、合致しない理由として文献史料が「築城や使用当時に書かれたものでなく、後世に記されたものであるからだと考えられ、

文献の相互批判を進めた上で築城・使用年代を特定することが望ましい」と指摘している（栞畑・東 1997）。また文明ボラの年代比定については、「文明年間」や文明 3（1471）年から文明 8（1476）年を包括する「西暦 1470 年代」という現状が述べられている（栞畑 2012）。

この文明噴火では、桜島から北東方向に噴出物が降下している（小林・江崎 1996）。鹿児島県では、当遺跡の所在する曾於市末吉町や財部町、霧島市福山町の遺跡で確認されているが、文明ボラを含む遺構が検出された遺跡は少なく 12 遺跡であった（第 6 表 1～12）。その中で、文明ボラに覆われた遺構が最初に確認されたのは、福山町の藤兵衛坂段遺跡の畠跡である（福山町教育委員会 1997）。鹿児島県内における文明ボラを含む遺構は、溝状遺構が最も多く、その中でも関山西遺跡は、溝状遺構内の文明ボラの堆積が非常に厚く、残存状況がよい。また当遺跡に隣接する宮崎県都城市では非常に多くの遺跡で、文明ボラを含む遺構が検出されている。都城市においても溝状遺構の検出が最も多く、道路状遺構、鹿児島での確認がない水田跡や小溝状遺構群が続く。畠跡、畝間状遺構が続く。報告書等の記載を参考に鹿児島県の遺跡と合わせて第 15 図に示している。栞畑氏は、水田跡や小溝状遺構群において、文明テフラ等現存層厚 30cm 以上エリアでの畠跡の耕作放棄や 10cm 程度のエリアでの復旧が見られることを述べている（栞畑 2014）。鹿児島県の藤兵衛坂段遺跡の畠跡は現存層厚 40cm エリアにかかる。畝を立てたまま文明ボラにパックされた状態であった。鹿児島県は噴出源に近く、文明ボラの堆積が厚かったことなどが考えられることから、今後の調査で中世の畠跡の類例が増え、利用等についての情報が得られることを期待したい。

第 4 節 おわりに

今回の調査では、第 2 章遺跡地図にあるように広大な柳迫遺跡の一部分の調査であり、得られた情報は限定的である。文明ボラに覆われた溝状遺構が検出されたが、調査区西側に延びている状況が確認された。時期不明とした帯状硬化面も調査区の西側、東側へも延びていくことが考えられる。調査区周辺への遺跡の広がりや残存状況が想定される。



アジア航測株式会社の赤色立体地図図作成手法（特許 3670274、特許 4272146）を使用し作成
 テフラ等層厚線は、小林・江口（1996）を参考

第15図 文明ボラを含む遺構検出遺跡

第6表 文明ボラを含む遺構検出の遺跡一覧表

番号	遺跡名	文明ボラの層	遺構名	備 考	掲 載
			文明ボラ（直下▲埋土○）		
1	藤兵衛坂段	Ⅱ	畝状遺構○	畠1～17まで検出	1997鹿児島県姶良郡福山町（3）
2	前原和田	Ⅱ	古道○	古道9条のうち2条に文明ボラが埋土で入る	2002鹿児島県埋セ（36）
3	踊場	Ⅱ	畠跡▲	畠跡1～4 検出 畝間に文明ボラが堆積	2004鹿児島県埋セ（71）
4	桐木	Ⅱ	古道○	こー26区断面、う・えー21区断面：最終埋土文明ボラ堆積	2005鹿児島県埋セ（91）
		Ⅱ	道跡○畑跡○	道跡9・10、畑跡ボラ抜きを行った形跡あり	2004鹿児島県埋セ（76）
5	関山西	Ⅱ	溝状遺構○	溝状遺構1・2・4の埋土に文明のボラが厚く堆積	2008鹿児島県埋セ（126）
6	関山	Ⅱ	溝状遺構○	文明ボラ層の下に溝状遺構	2008鹿児島県埋セ（125）
7	西原段Ⅰ	Ⅱ	道跡▲畑跡▲	文明ボラ直下のⅢa層直下で畑に直行する報告で道跡を3条検出	2009鹿児島県埋セ（139）
8	建山	Ⅱ	溝状遺構○	5号溝状遺構の埋土にボラ含む	2009鹿児島県埋セ（139）
9	狩俣	Ⅱ	溝状遺構○畝間遺構○	溝状遺構12、畝間遺構11の埋土に文明ボラ	2010鹿児島県埋セ（152）
10	稲村	Ⅱ	道路状遺構▲	硬化面を伴う道路状遺構との掲載	2010鹿児島県埋セ（153）
11	柳迫	Ⅱa	溝状遺構○	溝状遺構2に堆積。土層断面には4条全ての溝の上に堆積	本報告書
12	西栗須	Ⅲ	溝状遺構4T:○、7・9T:▲	4 T：V字溝状遺構の埋土。7 T・9 T：溝状遺構の埋土。	1998鹿児島県宮於郡財部町（5）
13	庄内小学校	Ⅲ	井戸跡○	SE01埋土非常に薄い堆積	2010都城市埋セ（100）
14	上牧第2	Ⅱ黒土と混色	畝状遺構▲	白色の粒が非常に薄く堆積している	1999宮崎県埋セ（18）
15	牧ノ原第2	Ⅱ	畝状遺構▲	構成の削平のため残存は良好ではない	1999宮崎県埋セ（19）
16	横市中原	Ⅱ	小溝状遺構？	畠跡と思われる小溝状遺構をⅡ層状態で検出	2004宮崎県埋セ（85）
		Ⅲ	水田跡▲	文明ボラで覆われた状態で検出。遺跡のほぼ全域が水田化されていたと考えられる。	1999都城市埋セ（47）
17	脇穴	Ⅲ	水田跡▲	第1水田：12面、第2水田：11面、第3水田：9面、第4水田：11面、第5水田：8面	2008都城市埋セ（85）
18	鶴喰	Ⅱ	水田跡▲	A地区：文明ボラでバックされた水田跡が見つかる	1998都城市埋セ（44）
19	坂元A	Ⅳ	疑似畦畔▲	疑似畦畔：一部は掘り起こされずそのまま。多くは降下後区画の復元を行う。水田跡には攪拌されたボラ。	2006都城市埋セ（71）
20	馬渡	Ⅲ	水田跡▲	B地区：旧地形の傾斜に合わせて南から北へと棚田状に形成された水田面を検出	2000都城市埋セ（50）
21	中尾	Ⅱ－2	畠跡▲	畠跡：小溝状遺構群うつつら堆積 ※一次堆積のみでなく混在畝状遺構：残存状態良好	2001宮崎県埋セ（42）
22	坂元B	Ⅳ	小溝状遺構群○	文明ボラを下層の黒土と一緒に掘り起こし、同じ場所に軽石を戻す	2006都城市埋セ（71）
23	今房	Ⅲ	畝状遺構▲水田跡▲	B地区：文明ボラが 残存していた北東部一帯で面的に水田と畝状遺構 を検出	2000都城市埋セ（50）
		－	畠跡▲土坑○水田跡▲	A：文明ボラがブロック状に堆積、土坑埋土内堆積状況の詳細は不明 B：ブロック状に堆積 C：攪拌されたボラが敷き詰まる	2005都城市埋セ（68）
24	平田	Ⅲ	溝状遺構○	SD06埋土内、SD132上面（部分的）薄く堆積	2008都城市埋セ（87）
		Ⅲ	水田跡▲道路状遺構○	SG8内に2つ掘込みあり東側の埋土の大半ボラ。SG群1埋土最上面SG4埋土中部大半	2007宮崎県埋セ（160）
		Ⅲ	溝状遺構○	溝状遺構1・2号の埋土上層に文明ボラ	2019宮崎県埋セ（247）
25	早馬	Ⅲ	溝状遺構○	SD11埋土内ブロック状に入る	2008都城市埋セ（84）
26	松下	Ⅲ	小溝状遺構群▲	形状から畠の畝間溝と判断。上層が純粋な文明ボラ層	2020宮崎県埋セ（252）
27	小松尾	Ⅲ黒色土にわずかに	溝状遺構○	B区SE3の埋土最上層に文明ボラ約80m。A区SE2の埋土上部に文明ボラ約80m。	2019宮崎県埋セ（250）
28	大島畠田	－	水田跡▲	1・4・10・11・18T文明ボラ直下水田跡	2000都城市埋セ（52）
29	上大五郎	基本土層にナシ	溝状遺構○	SE1・2埋土中部に薄く堆積	1996都城市埋セ（31）
30	棚田第1	Ⅳ	溝状遺構○	SD12・40～42上面埋土レンズ状堆積	2021都城市埋セ（146）
31	高城牧ノ原遺跡群	ⅣとⅤの間B層	溝状遺構○	SF4硬化層幅60cm厚さ10cmのレンズ状断面形。文明ボラを含む砂質土が硬化面に	2020都城市埋セ（142）
32	松原地区第Ⅰ	Ⅱ	溝状遺構○大溝○	大溝（空堀）の埋土Ⅱ層白ボラが検出面から上位1/3の所にレンズ（半円弧）状に堆積、2号溝に堆積あり。	1989都城市埋セ（7）
	松原地区第Ⅲ	Ⅱ	溝状遺構○	3・4・10・16号溝の埋土中に確認？堆積の仕方など記載なし	
	松原地区第Ⅳ	Ⅱ下部	溝状遺構○	SD1埋土下部SD7・8上面凹みにレンズ状堆積	2000都城市埋セ（51）
33	久玉	－	溝状遺構○道路状遺構○	久玉Ⅳ・A地区1号溝：埋土中部に堆積。硬化体となるものもあり。1号道路：第2次硬化体文明ボラ層の上面	1995都城市埋セ（32）
		Ⅲ	溝状遺構○	9次調査B地区SD02-3埋土最上面全て覆うレンズ状堆積	1999都城市埋セ（46）
		－	溝状遺構○	SD13埋土レンズ状 SD16埋土最上面一部分覆う	2000都城市埋セ（51）
34	南畑	Ⅱ	溝状遺構○	SD1上面から埋土の西側半分に堆積	2016都城市埋セ（123）
		Ⅱ	溝状遺構○	SD11埋土内上位レンズ状に堆積	2016都城市埋セ（123）
35	郡元西原	－	溝状遺構○	範囲確認調査：SD埋土最上面に文明ボラが厚く堆積	2018都城市埋セ（135）
		Ⅲ	溝状遺構○	大型溝状遺構埋土上面に薄く部分的に	2022都城市埋セ（149）
		Ⅳ	水田跡▲	文明ボラ降下直前まで使用していた水田SW3～5	2017都城市埋セ（130）
36	白山原	ⅡとⅢの間A層	水田跡▲	A耕作B水田耕作の影響を受け、水平に堆積することなし	2017都城市埋セ（131）
		Ⅲ	水田跡▲	B地区南側	2019都城市埋セ（137）
		基本土層にナシ	溝状遺構○	SD1埋土最上位に文明ボラ	2015都城市埋セ（116）
37	祝吉第3	－	溝状遺構○	大溝と記載。埋土上位に文明ボラ堆積	2018都城市埋セ（135）
		－	溝状遺構○	大型の溝状遺構埋土に多くの文明ボラが含まれる	2022都城市埋セ（149）
38	天神原（早水天神原）	Ⅲ	溝状遺構○土坑	SD2中層・SD3上～中層・SD5中層、SC中～下層びっしりSD12中層	1993都城市埋セ（23）
39	池島	－	溝状遺構▲	SE1の埋土が文明ボラ	2004宮崎県埋セ（84）
40	池ノ友（早水池ノ友）	ⅡとⅢの間	畝状遺構▲	SU1畝部分に筋状に確認	2000都城市埋セ（49）
41	柳川原	Ⅰ	道路状遺構○	1号溝西側埋土＋最上面一部に文明ボラ確認	1998都城市埋セ(43)
		－	溝状遺構○	SD5の埋土最上部に薄く堆積	2004都城市埋セ（65）
42	上ノ村	Ⅲ	溝状遺構○	SD1埋土内上面レンズ状堆積	2020都城市埋セ（143）
43	高田	Ⅲ	水田跡▲	1～36号水田跡の直上に10cmほど文明ボラ堆積。水田面に凹凸あり	2005都城市埋セ（70）
44	大岩田村ノ前	Ⅱ	道路状遺構○	SF1の埋土。Ⅲ＋Ⅳ層がレンズ状に20cmほど堆積した後、最厚60cm大部分を文明ボラが占める。レンズ状に堆積	1991都城市埋セ（14）
45	大岩田上村	Ⅲ	道路状遺構○	第1号道路状遺構西半分遺構の形状に沿って残存	2001宮崎県埋セ（38）
46	黒土	Ⅲ	溝状遺構○	1号溝状遺構は上位に厚く文明ボラが堆積。2号溝状遺構も上位に薄く堆積。	1994都城市埋セ（28）
47	筆無	Ⅱ	畝状遺構▲	全体的、薄く堆積。南側の残存状況が良い。	2008宮崎県埋セ（166）
48	上安久	Ⅲ	溝状遺構○	SD15・16 埋土内上位にレンズ状堆積	2011都城市埋セ（103）
49	王子原	Ⅲ	畝状遺構▲	すじがⅢbは東西、Ⅲc～Ⅳaで南北基調に変化。	※報告書「王子原・上安久遺跡」 2012都城市埋セ（106）
50	笹ヶ崎	A・C地区Ⅲ	溝状遺構○土坑墓○	溝状遺構：埋土内、土坑墓：埋土上層	2019宮崎県埋セ（240）
		－	溝状遺構○	溝状遺構埋土⑤が文明ボラ	2015都城市埋セ（119）
51	大年	Ⅱ	小溝列遺構▲畝状遺構▲道路状遺構▲	小溝列：底面に堆積。畝状遺構：南北に帯状に残存。残存状況良好。道路状遺構：埋土に厚く堆積	2016宮崎県埋セ（237）
52	保木島	Ⅱ黒色土に30％含む	溝状遺構○	SE1の埋土上部に文明ボラがレンズ状堆積	2021宮崎県埋セ（258）
53	上高	Ⅱ黒色土に30％含む	溝状遺構○	SG4・6埋土上部、SG7埋土部分的に文明ボラのみのところあり。再掘削した遺構か？	2020宮崎県埋セ（254）
54	小迫	Ⅱa黒色土に含む	道路状遺構○	SG1埋土中部に薄くレンズ状堆積	2021宮崎県埋セ（257）



第16図 鹿児島県実測図（明治10年陸軍参謀局）（鹿児島県立図書館所蔵）

【参考・引用文献】

桒畑光博

1989「東南部九州におけるある縄文土器の型式組列—中岳Ⅱ式土器の再検討—」『鹿児島考古』

第 23 号 鹿児島県考古学会

2012「桜島火山起源の中世テフラの降下年代について」『宮崎考古』第 23 号 宮崎考古学会

2014「桜島火山噴火災害を受けた中世の水田と畠」『新田栄治先生退職記念論文集』新田栄治先生退職記念事業会

2024「中世の桜島噴火による田畠の災害と対応」『列島の人々は火山災害にどのように向き合ってきたのか』山川出版社

桒畑光博・東和幸 1997「南九州の火山灰と考古学遺物」『月刊地球』214 号 海洋出版株式会社

小林哲夫 1986「桜島火山の形成史と火砕流」文部科学研究費特別研究，計画研究『火山噴火に伴う乾燥粉体流（火砕流等）の特質と災害』（代表者 荒牧重雄）報告書

小林哲夫・江崎真美子 1996「桜島火山の噴火史」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書（Ⅶ）』名古屋大学年代測定資料研究センター

東和幸 1996「南九州の火山灰と土器形式—アカホヤ火山灰以降—」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書（Ⅶ）』名古屋大学年代測定資料研究センター

宮崎大和 2023「大隅半島における縄文時代後期後葉の土器の様相—中岳Ⅱ式土器を中心に—」研究紀要・年報『縄文の森から』第 15 号 鹿児島県立埋蔵文化財センター

写真図版



①調査区空撮（真上から）

②土器出土状況

③磨製石斧出土状況



①土坑 1 検出状況

②土坑 1 半裁状況

③土坑 1 完掘状況

④土坑 2 検出状況

⑤土坑 2 半裁状況

⑥土坑 2 完掘状況



①溝状遺構検出状況

②溝状遺構東西ベルト断面図



①溝状遺構北西側断面図

②溝状遺構1～4完掘状況(北から)

図版5 縄文時代後期の遺物(1)





鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（227）
特定交通安全等整備事業（深川工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

柳迫遺跡

発行年月	2024年12月
編集・発行	鹿児島県立埋蔵文化財センター 〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811 FAX 0995-48-5821
印刷所	濱島印刷株式会社 〒890-0052 鹿児島県鹿児島市上之園町17番地2 TEL 099-255-6121 FAX 099-259-1629



鹿児島県